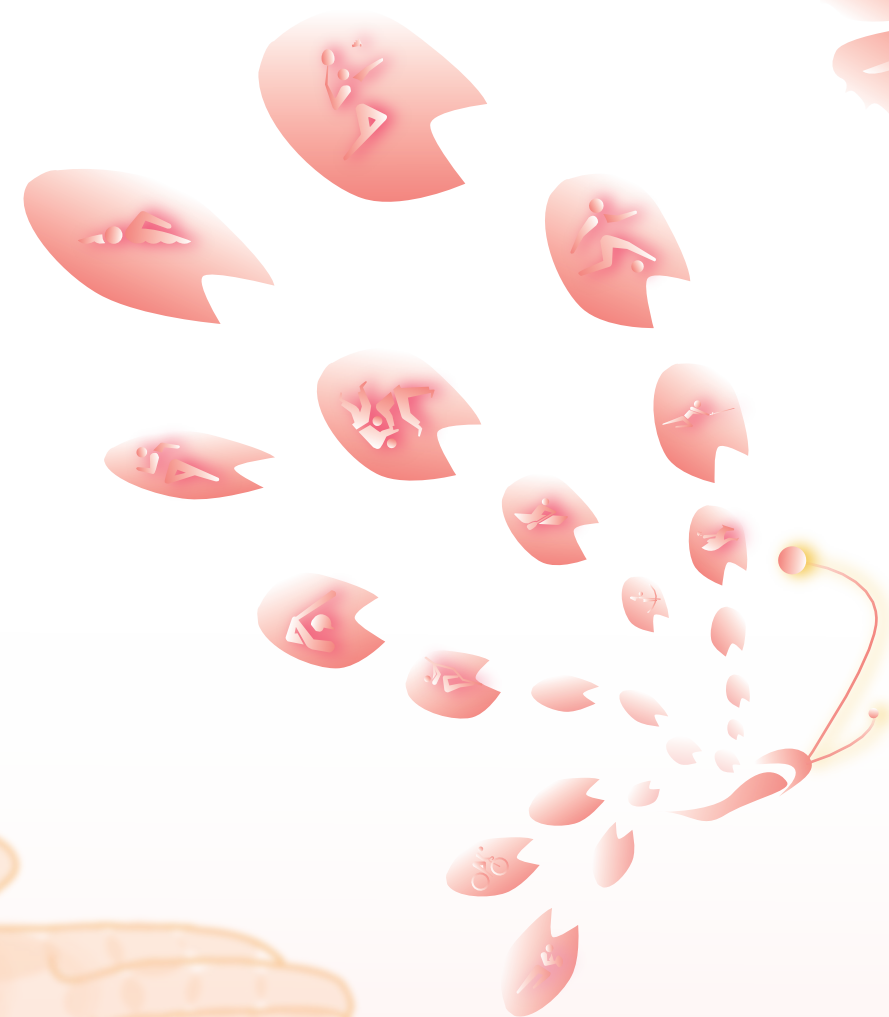




身体運動文化学会 創立 30 周年記念大会

大会テーマ
身体運動文化と

スポーツ・インテグリティ



日時：2025 年 12 月 6 日（土）・7 日（日）
場所：日本大学文理学部キャンパス
百周年記念館 2 階国際会議場・会議室 1・2
主催：身体運動文化学会創立 30 周年記念大会実行委員会
大会事務局：〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部体育学科 川井研究室

身体運動文化学会創立 30 周年記念大会
身体運動文化とスポーツ・インテグリティ

目次

1	会場案内		2 頁
2	学部長挨拶	岡 隆 (日本大学文理学部長)	5 頁
3	会長挨拶	前林 清和 (神戸学院大学現代社会学部 教授)	6 頁
4	大会実行委員長挨拶	川井 良介 (日本大学文理学部 助教)	7 頁
5	スケジュール		8 頁
6	基調講演	国内外におけるスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題 久木留 毅 氏 (独立行政法人日本スポーツ振興センター理事 (ハイパフォーマンスポーツ・研究担当) ハイパフォーマンスポーツセンター長 国立スポーツ科学センター所長)	10 頁
7	シンポジウム	現代社会におけるスポーツ・インテグリティ教育の最前線 シンポジスト 勝田 隆 氏 (東海大学体育学部 特任教授) 神田 義輝 氏 (株式会社 Criacao 執行役員 CHRO) 安永 太地 氏 (早稲田大学スポーツ科学学術院 助教) コーディネーター 齋藤 実 氏 (専修大学文学部 教授)	11 頁
8	一般研究発表		14 頁

【参加申込について】

- ・参加申し込みは、2025 年 11 月 28 日 (金) まで可能です。右記の QR コードからお申し込みください。
- ・2025 年 12 月 6 日 (土) の祝賀会にご参加の方は、学会大会当日の受付にて参加費 7,000 円 (大学院生は 5,000 円) を徴収いたしますので、ご準備をお願いいたします。



【会場内での Wi-Fi のご利用について】

- ・右記の QR コードから日本大学文理学部の HP にアクセスし、「●CMS (キャンパスモバイルシステム)」の利用方法の「(1) CMS の利用方法」から「無線 LAN 利用マニュアル (CMS)」をご確認ください。なお、CMS の Wi-Fi を利用するためには、以下のパスワードやログイン ID が必要となりますので、ご注意ください。



★SSID「CMS」への接続：CMS のパスワードは「153255102」です。

★CMS へのログイン：CMS へ接続後、以下のログイン ID とパスワードをご入力ください。

ログイン ID 「 g25023 」

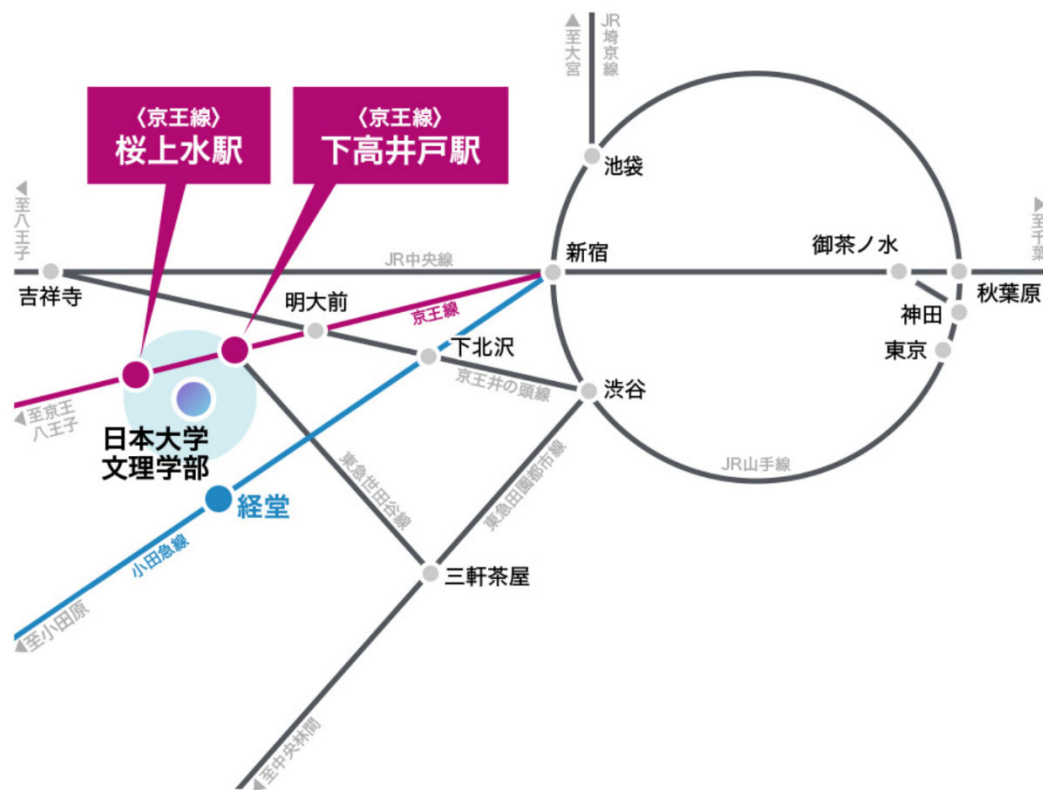
パスワード 「 d2MR7QEd 」

1 会場案内

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部キャンパス 百周年記念館 2階 国際会議場・会議室 1・2

※今大会の会場である百周年記念館は、日本大学文理学部キャンパスの正門から道を挟んで反対側にあります。



主要な駅から最寄り駅まで

【京王線】新宿駅・渋谷駅から下高井戸駅（快速停車駅）：所要時間 10～12 分

新宿駅・渋谷駅から桜上水駅（急行停車駅）：所要時間 10～12 分

【小田急線】新宿駅・渋谷駅から経堂駅（急行停車駅）：所要時間 13～17 分

最寄り駅から会場まで

【京王線・東急世田谷線】下高井戸駅下車 徒歩 8 分

【京王線】桜上水駅下車 徒歩 8～10 分

【小田急線】経堂駅下車 徒歩 20～25 分

日本大学文理学部キャンパス付近の地図



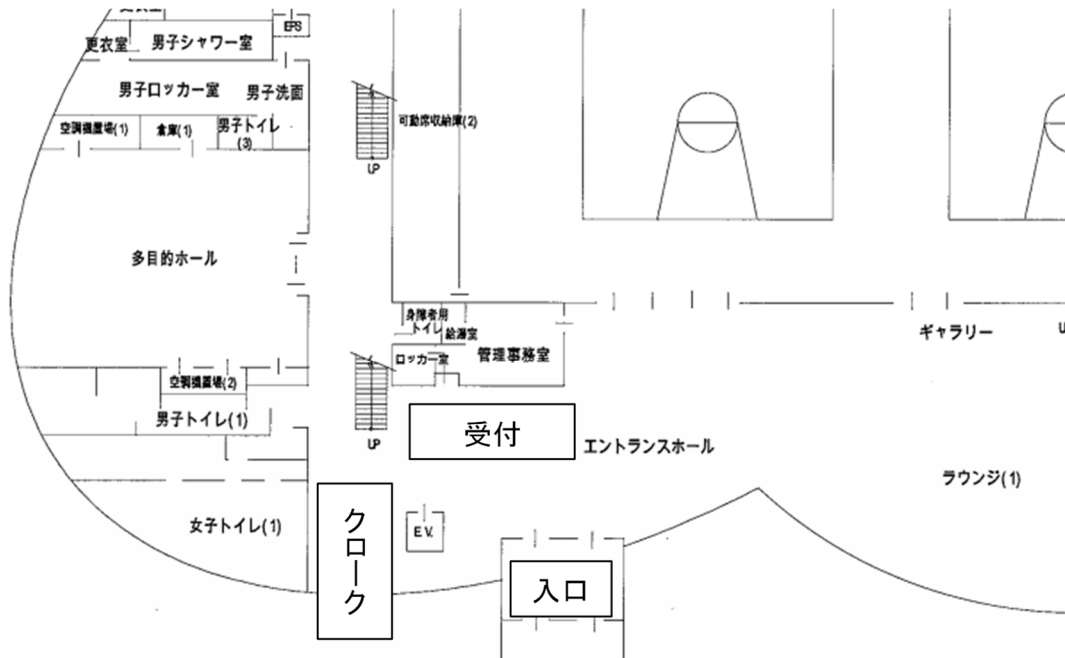
日本大学文理学部キャンパスの地図

※百周年記念館の入口は、日本大学文理学部正門の目の前にございます。

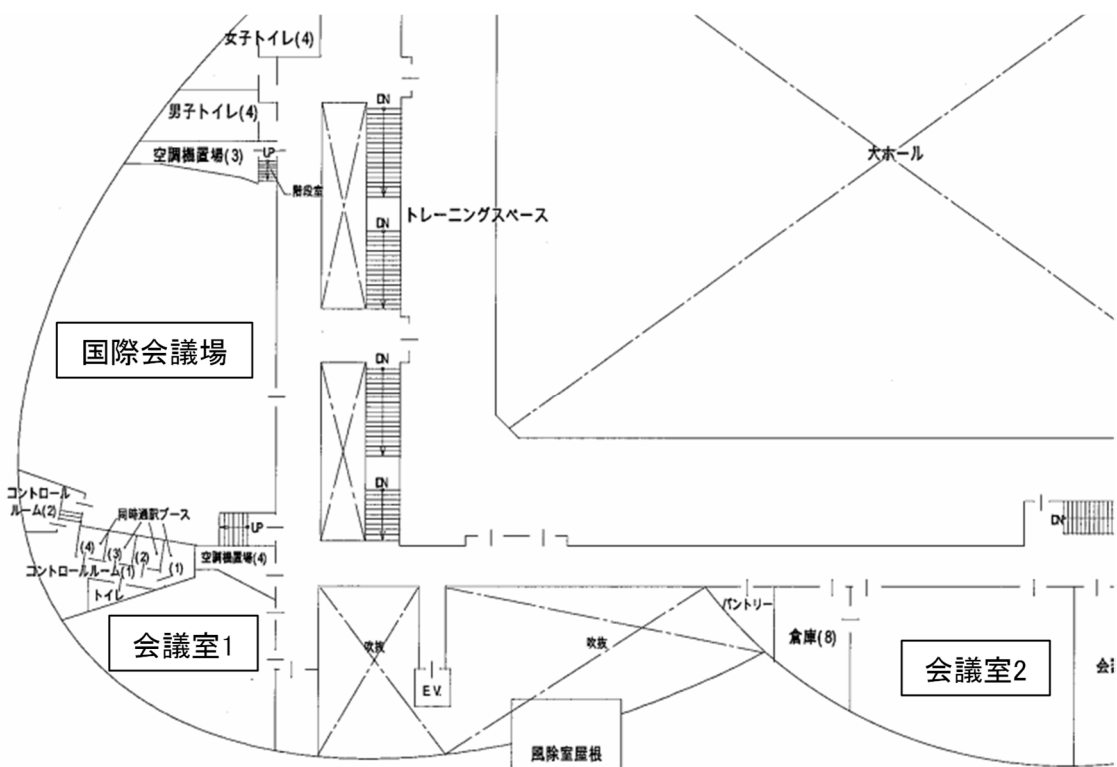


百周年記念館 案内図

1 階（受付・クローク）



2 階（国際会議場・会議室 1・会議室 2）



2 学部長挨拶 岡 隆（日本大学文理学部長）

この度は、身体運動文化学会創立 30 周年記念大会の開催、誠におめでとうございます。創立 30 周年という記念すべき節目を迎えるにあたり、ここ、日本大学文理学部で開催されることとなりました。このような意義深い大会の会場校を務めさせていただけることは、学部としてこの上ない光栄であり、教職員一同、深く感謝申し上げます。そして、貴学会が 30 年の長きにわたり、弛まぬ発展を遂げられましたこと、心よりお慶び申し上げます。



この 30 年間、人類を取り巻く環境は激変しました。グローバル化、情報技術の飛躍的発展、そして近年ではポスト・コロナにおける生活様式の変化など、社会は常に新たな課題を提示し続けています。こうした時代において、貴学会は、単に「身体」や「運動」という個別の事象を研究するに留まらず、それらを「文化」という広範な視点、すなわち、歴史、思想、哲学、社会、そして芸術といった多角的な文脈から捉え直すことで、学際的な知の交流と創造の場を提供されてこられた貴学会の功績は計り知れません。

本大会の「身体運動文化とスポーツ・インテグリティ」というテーマは、現在の日本大学が抱えている問題と深く共鳴するものであり、貴学会が積み重ねてきた 30 年の知見を土台としつつ、これから先の未来に向けて、身体運動文化の持つ可能性を大胆に問い直す、絶好の機会となると確信しております。本大会では、記念講演、シンポジウムに加え、多数の一般研究発表が行われると聞いております。若手研究者からベテランの先生方まで、幅広い世代による多様な視点からの議論が展開されることでしょう。この豊かな学術交流を通じて、従来の学問分野の境界が溶解し、新たな研究の「越境」が生まれ、身体運動文化研究の「新たな地平」が拓かれることを心から期待しています。また、研究発表だけでなく、日頃、デジタルな情報に囲まれがちな私たちにとって、この場で直接対話し、熱い議論を交わすという、身体性を伴った交流そのものが、極めて重要な意味を持つと強く感じています。

末筆ではございますが、本大会の開催にご尽力いただきました大会実行委員会の皆様、そして学会事務局の皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。身体運動文化学会のさらなる飛躍と、ご参会の皆様のご活躍を祈念し、ご挨拶に代えさせていただきます。どうぞ、2 日間にわたり、有意義な時間をお過ごしください。

3 会長挨拶 前林 清和（神戸学院大学現代社会学部）

会員ならびにご来賓の皆さま、本日は「身体運動文化学会創立 30 周年記念大会」にご参集いただき、心より御礼申し上げます。本学会は、身体運動を文化としてとらえる独自の視座を礎に、研究・教育・実践を往還しながら歩みを重ね、今年、創立 30 年という節目を迎えました。長年にわたる会員各位の研鑽とご支援、そして関係機関のご理解とご協力に、まずは深く感謝申し上げます。



本記念大会のテーマは「身体運動文化とスポーツ・インテグリティ」です。スポーツを取り巻く諸課題が複雑化・可視化するなかで、フェアネス、誠実性、ガバナンスといった価値は、もはや競技現場に留まらず、教育、地域、産業、メディアなど社会の広範な領域で共有されるべき規範へと拡張しています。本大会では、インテグリティの理念を「概念の検討」ととどめず、「制度と運用」「教育と実践」「文化としての身体運動の継承」という層へ接続し、多角的に議論を深めてまいります。

会場校である日本大学では、ガバナンスやコンプライアンスを主題とする継続的な研修の実践が進められており、その知見の共有は、本テーマを掲げる本大会にふさわしい契機となりました。学知と実践が響き合う場として、本学会ならではの批判的・創造的対話が生まれることを期待しています。

プログラムは、12月6日（土）・7日（日）の二日間にわたり構成されています。初日は久木留毅先生（HPSC 長／JISS 所長）による基調講演「国内外におけるスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題」、そしてシンポジウム「現代社会に広がるスポーツ・インテグリティ教育の最前線」を開催します。シンポジウムでは、勝田 隆 先生（東海大学）、神田 義輝 先生（株式会社 Criacao）、安永 太地 先生（早稲田大学）、コーディネーターに齋藤 実 先生（専修大学）をお迎えし、最新の動向から組織経営、教育実践まで、理論と現場を架橋する議論を展開いただきます。夜には、30 周年の節目を皆さまと共に寿ぐ記念祝賀会をアルカディア市ヶ谷私学会館にて執り行います。翌 7 日（日）は一般研究発表を通じ、会員諸氏の最前線の成果を広く共有し、次の 10 年に向けた研究課題を具体化する機会といたします。

本学会はこれまで、「自然と人間」「身体運動文化と地域」など、開催地の文脈を踏まえつつ主題を更新し、身体運動文化の多様性と公共性を掘り下げてまいりました。30 年の継承は、単に年月を重ねてきたということではなく、各大会での対話と実践が次大会の問いを駆動してきた「知の循環」であると考えます。

記念大会にあたり、あらためて三つの展望を共有いたします。第一に、身体運動文化を「社会の信頼資本」と位置づけ、インテグリティの確立を通じて、スポーツと社会のより良い関係を設計すること。第二に、地域・教育・文化・科学・産業など隣接領域との協働を深化させ、身体運動の価値をライフコース全体で再定義すること。第三に、研究倫理とデータガバナンスの基盤を強化し、開かれた学術コミュニティとして透明性と説明責任を果たすことです。これらは本大会の討議と実践の先に、次の 10 年を見据える私たちの共通目標でもあります。

結びに、開催準備に尽力くださった日本大学の先生方ならびに大会実行委員会、関係各位、協賛・協力団体の皆さまに心より御礼申し上げます。ここに集う多領域の知と実践が交差し、身体運動文化の未来を切り拓く二日間となることを祈念し、開会のご挨拶といたします。

4 大会実行委員長挨拶 川井 良介（日本大学文理学部）

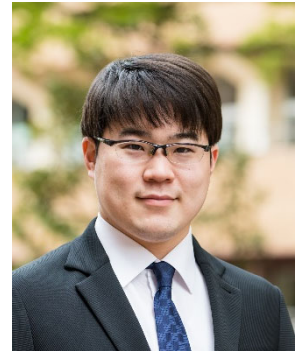
小雪の候、会員の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、身体運動文化学会創立 30 周年記念大会を開催するにあたり、ご挨拶を申し上げます。

本大会では、「身体運動文化とスポーツ・インテグリティ」をテーマに大会実行委員会にて鋭意準備を進めてまいりました。本大会のテーマとして掲げさせていただいたスポーツ・インテグリティは、体育・スポーツ・健康科学に関する研究活動やスポーツ指導に関わっておられる先生方におかれましては、近年、耳にすることが増えた言葉かと存じます。この言葉を耳にする機会が増えた背景には、スポーツをめぐるトラブルが非常に多く生じていること、それらに共通する原因としてスポーツ・インテグリティの欠如が指摘されていることが挙げられます。

本大会の会場校である日本大学では、2018 年のアメリカンフットボール部の悪質タックル問題に端を発し、大学のガバナンス体制やコンプライアンスに関する問題にまで発展しました。また、現在に至るまでも各競技部において大小様々な問題が生じていることは確かです。現在では、それらの問題への対策の一つとして、大学内のスポーツ部門を統括する競技スポーツセンターが各競技部の部長や副部長、監督、コーチ、部員を対象としたガバナンスやコンプライアンス、スポーツ・インテグリティをテーマとした研修を継続的に実施し、再発防止に努めております。

この度、上述のような取り組みを通じて意識改革を進める日本大学が会場校となったことを契機に、本大会では「身体運動文化とスポーツ・インテグリティ」をテーマとして掲げ、このテーマについて多角的に検討するとともに、学術的な知見を深める大会プログラムを設定いたしました。なかでも基調講演では、独立行政法人日本スポーツ振興センターの HPSC 長、JISS 所長の久木留毅氏をお招きし、現在のお立場やこれまでの研究活動の中から国内外のスポーツ・インテグリティに関する今日的課題、国際的な潮流、そして国内外の種々の取り組みについて、話題提供をいただきます。シンポジウムについては、「現代社会におけるスポーツ・インテグリティ教育の最前線」をテーマに、スポーツ・インテグリティをキーワードに研究活動をされている東海大学の勝田隆氏や早稲田大学の安永太地氏をお呼びし、両氏が行ってきた研究活動や様々な取り組みについて、ご発表をいただきます。また、株式会社 Criacao の神田義輝氏には、各種団体に向けたスポーツ・インテグリティ研修の内容や実践例について、スポーツ団体の経営側の視点から貴重なお話をいただきます。それぞれのお立場からスポーツ・インテグリティに関する知見を共有いただき、今後の課題について深く議論できる場となることを期待しております。

結びに、本大会が会員の皆様にとって有意義で、学术交流を深める思い出深いものとなりますことを心より祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



5 スケジュール

【12月6日（土）】

1. 11：30～ 常任理事会・理事会（百周年記念館 2 階 会議室 2）

12：00～ 受付

2. 13：00～ 開会・会長挨拶（百周年記念館 2 階 国際会議場）

3. 13：05～14：20 基調講演（百周年記念館 2 階 国際会議場）

国内外におけるスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題

- 久木留 毅 先生（独立行政法人日本スポーツ振興センター理事
（ハイパフォーマンスポーツ・研究担当）
ハイパフォーマンスポーツセンター長
国立スポーツ科学センター所長）

14：20～14：30 休憩

4. 14：30～17：00 シンポジウム（百周年記念館 2 階 国際会議場）

現代社会に広がるスポーツ・インテグリティ教育の最前線

◆シンポジスト

- 勝田 隆 先生（東海大学体育学部）
スポーツ・インテグリティと向き合う視点
～概念の捉え方と取り組みの動向から～

- 神田 義輝 先生（株式会社 Criacao）
スポーツ団体経営からみたインテグリティ

- 安永 太地 先生（早稲田大学スポーツ科学学術院）
教育学の視点から取り組むスポーツ・インテグリティ教育の実践

◆コーディネーター

- 齋藤 実 先生（専修大学文学部）

5. 18：00～20：00 身体運動文化学会創立 30 周年記念祝賀会

（アルカディア市ヶ谷私学会館 4 階 飛鳥の間）

【12月7日（日）】

1. 9:00～12:55 一般研究発表（百周年記念館 2 階 会議室 2）

時間	座長	発表者	演題
09:00～09:20	菅野 慎太郎 （日本大学）	沢井 大樹 （東海大学大学院）	筋力トレーニング実践者のライフスタイルに関する質的研究
09:20～09:40		川井 高光 （筑波大学大学院）	男子大学剣道選手の競技的成長に関する一考察 －KJ法を用いた質的研究－
09:40～10:00		相原 太郎 （東海大学大学院）	スキー愛好家の関与スタイルの検討 －語りによるモデル構築－
10:05～10:25	川井 良介 （日本大学）	大原 沙智 （天理大学大学院）	大学女子競技選手における月経前症候群がウィングートテスト による無酸素性パワー発揮に及ぼす影響
10:25～10:45		馬越 千里 （聖カタリナ大学）	剣道における女性と昇段に関する探索的研究
10:50～11:10	北澤 太野 （天理大学）	千葉 寛樹 （日本大学大学院）	剣道授業の指導内容開発と展開 －教科指導に残存する種目主義の超克は可能か？－
11:10～11:30		南方 隆太 （山梨学院大学）	野球の普及振興施策の策定に向けた課題の検討 －競技に“触れる”から“する”までの過程に着目して－
11:30～11:50		益川 満治 （弘前大学）	ボールゲーム授業における「状況を見立てる力」を可視化する OODAループ学習カードの開発
11:55～12:15	阿部 弘生 （仙台大学）	堀川 峻 （環太平洋大学）	佐藤卯吉の剣道論にみられる思想的展開 －「国民体育」振興との関連に着目して－
12:15～12:35		楊 紅梅 （筑波大学大学院）	明治初期における東京大相撲協会の形成
12:35～12:55		鉄 多加志 （東海大学）	日本における素潜り漁と関連する文化の考察

2. 13:00～ 総会（百周年記念館 2 階 会議室 2）

6 基調講演

くきどめ たけし
久木留 毅 氏

独立行政法人日本スポーツ振興センター理事
(ハイパフォーマンスポーツ・研究担当)
ハイパフォーマンスポーツセンター センター長
国立スポーツ科学センター所長



博士（スポーツ医学）／修士（政策科学、体育学）

筑波大学大学院体育研究科修了。法政大学大学院政策科学専攻修了。

スポーツ庁参与、日本パラリンピック委員会（JPC）運営委員会委員・特別強化委員会委員、英国ラフバラ大学客員研究員、国際スポーツ強化拠点連合（ASPC）アジア大陸理事、世界レスリング連合（UWW）テクニカル委員会委員・科学委員会委員、日本オリンピック委員会（JOC）情報戦略部門部門長、日本レスリング協会ナショナルコーチ兼テクニカルディレクター、専修大学教授などを歴任。

国内外におけるスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題

日本において「スポーツ・インテグリティ」が大きく取り沙汰されるようになったのは、2007年に欧州評議会が政策課題としたことが契機である。当時、ヨーロッパではプロスポーツを中心に、違法賭博、八百長、暴力、ドーピング行為など、スポーツの価値を脅かす脅威が相次いで発生していた。一方、日本では、2011年にスポーツ振興法が半世紀ぶりに全面改正され、スポーツ基本法が公布された。この過程でスポーツの価値について幾度も議論がなされた。しかし、その後、2012年から2013年にかけて、部活動における体罰や暴力指導が大きな社会問題となった。政府は体罰根絶に向けた通知と指導に関する要請をスポーツ界に発し、日本スポーツ協会（旧：日本体育協会）を始めとした五団体が協力して「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」を採択した。その中で（独）日本スポーツ振興センターは2014年、日本におけるスポーツ・インテグリティの保護・強化を目指し、法律に基づきスポーツ・インテグリティ・ユニットを設置した。ただ、その後も大学スポーツなどにおける不祥事問題は後を絶たない。現在、スポーツ・インテグリティをめぐる課題は、国内外でさらに広がりを見せている。アンチ・ドーピング、スポーツベッティング、エンハンスメント・ゲームズ、トランスジェンダーをめぐる性別遺伝子検査など、多くの課題が山積している。さらに、これらに加え、オリンピック・パラリンピック競技大会を取り巻く変化、ハイパフォーマンスポーツにおける国際的な潮流と動向、競技の不正操作に関する事案（マコリン条約）、部活動の地域展開、スポーツ基本法の改正など、国内外の変化は目まぐるしい。そこで、ここでは国内外のスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題について参加者と共有するとともに、課題解決に向けた道筋について議論を深めたい。

7 シンポジウム

現代社会におけるスポーツ・インテグリティ教育の最前線

【登壇シンポジスト プロフィール（順不同）】

かつた たかし
勝田 隆



氏（東海大学体育学部 特任教授）

博士（スポーツ科学）。長年にわたり、日本スポーツ界の強化・運営に深く関わり、日本スポーツ振興センター理事（ハイパフォーマンススポーツセンター長、国立スポーツ科学センター長、スポーツ・インテグリティ・ユニット長）などを歴任。また、日本オリンピック委員会選手強化本部常任委員、日本パラリンピック委員会強化委員、日本ラグビー協会代表チーム強化委員長などを務める。現在、日本スポーツ協会指導者育成委員会委員長。

かんだ よしてる
神田 義輝



氏（株式会社 Criacao 執行役員 CHRO）

大学時代には早稲田大学ア式蹴球部（サッカー部）に所属。卒業後には株式会社リクルートにて、転職支援事業全般の業務に従事。その後は J リーグ等のスポーツ団体で選手、指導者に向けたキャリア開発、人材育成に従事。2018年に株式会社 Criacao に入社し、アカデミーの立ち上げ、人事組織の立ち上げ等を行う。水戸ホーリーホック元取締役。一般社団法人日本トッリーグ連携機構等でスポーツ・インテグリティに関する教育・研修等を実践している。

やすなが たいち
安永 太地



氏（早稲田大学スポーツ科学学術院 助教）

博士（スポーツ科学）。中京大学体育学部を卒業後、静岡大学大学院教育学研究科、愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科にて学び、2024年4月より現職。スポーツ・インテグリティ、ハラスメント予防、リスクマネジメント、研修教材開発などをキーワードに研究活動に取り組む。2019年と2020年には、JOC オリンピック強化指定選手インテグリティ教育プログラムの研修講師を複数回務めた実績を持つ。

【登壇コーディネーター プロフィール】

さいとう まこと
齋藤 実



氏（専修大学文学部 教授）

茨城県立医療大学助手、大妻女子大学人間生活科学研究所助手、国立スポーツ科学センター・スポーツ情報研究部研究員を経て、専修大学に着任。全日本剣道連盟公認七段の段位を有し、2001年より全日本剣道連盟強化訓練講習会トレーニングコーチ、2003年・2006年の世界剣道選手権大会では日本代表チームトレーニングコーチなどを歴任。また、全日本剣道連盟医・科学委員会委員、川崎市スポーツ推進審議会会長などを務め、トップレベル競技者へのコンディショニング・医科学サポートをはじめ、地域スポーツの振興にも寄与している。日本スポーツ協会公認コーチデベロッパー。

スポーツ・インテグリティと向き合う視点 ～概念の捉え方と取り組みの動向から～

勝田 隆 氏（東海大学体育学部）

「スポーツは、世界共通の人類の文化である。（スポーツ基本法）」そして「スポーツ・インテグリティは、人類及び社会の持続可能な発展に対するスポーツの貢献を保護し、最大化するための前提条件（欧州評議会,2020）」と謳われている。

気候変動や人工知能(AI)の進展など、多様な社会変化や課題と向き合う時代。

人と人・組織が、スポーツを通じて豊かに関わり、つながり、良き「学び」や生きがいを楽しむ社会に向けて、「スポーツ・インテグリティ」という言葉をもとに向き合い、探求していく視点について提案的に論じる。具体的には、国内外の動向を概観し、ウェルビーイングや間身体性といった概念などを念頭に、以下のような視点から考察する。

「捉え方」および「取り組み」について考える視点

- [視点1：対象・エリア] ・人 *people*、競技 *competition*、組織 *organisations*、システム *systems*
 ・脅威 *threats*、課題 *issues*
- [視点2：アプローチ] ・保護 *protect* 最大化 *maximise* （ソーシャルグッド）
 ・プリンシプルベース ・ルールベース ・エビデンスベース
 ・ソーシャルラーニング ・コンヴィーナー *Convener*

スポーツ団体経営からみたインテグリティ

神田 義輝 氏（株式会社 CriacaoO）

本講演では、株式会社 Criacao や水戸ホーリーホックでの経営参画、Jリーグでの新人研修など、私の実体験に基づき、スポーツクラブ経営における「インテグリティ（高潔さ）」の実践を照会する。

スポーツ界を取り巻く社会環境や期待が急激に変化する現代において、単なる「リスクマネジメント（損失の回避）」の枠を超え、「誠実さ・高潔さ・真摯さ」を追求するインテグリティの確立こそが、クラブの持続可能な成長には不可欠である。私は、インテグリティの欠如が勝利至上主義やハラスメントを助長し、人材流出やブランド毀損という「負のループ」を招く構造を危惧している。対して、高いインテグリティは信頼と新たな価値を創造し、優秀な人材と資金が集まる「正の循環」を組織にもたらすと考えている。

その実現に向けた具体的なアプローチとして、知識のアップデートのみならず、自身の「アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）」への自覚、他者からのフィードバックの受容、そして組織内の「心理的安全性」の醸成を提言したい。競技人口の減少などの課題に直面する今、スポーツが社会から選ばれ続ける存在であるために、サッカークラブ経営での実践を共有する。

教育学の視点から取り組むスポーツ・インテグリティ教育の実践

安永 太地 氏（早稲田大学スポーツ科学学術院）

本講演では、教育学における教育方法を専門とする立場から、ユース世代を対象に展開してきたスポーツ・インテグリティ教育の実践を報告する。まず、スポーツ・インテグリティについて、不正行為を抑止する「予防倫理」と、理想や価値の実現を目指す「志向倫理」という二つの理念的側面に整理した上で、双方に合わせた教育的アプローチを提案する。志向倫理の観点からは、道德教育の理論を援用し、モラル・ジレンマや価値の明確化教材を通じて、学習者が「どのような選手でありたいか」を主体的に探究する教育的アプローチである。一方、予防倫理の観点からは、リスクマネジメント理論を参考に、リスク特定やリスク評価・分析の理解を深めることや意識変容を促す教育的アプローチを展開してきた。さらに近年では、スポーツ系の大学初年次教育において、予防倫理と志向倫理を組み合わせたカードゲーム型教材を導入し、楽しく学べる授業を実践している。これらの実践は、知識伝達ではなく、対話を中心としたアクティブラーニング型で展開するとともに、アスリートや指導者の自律的思考を育むスポーツ・インテグリティ教育としての新たな可能性に挑戦するものである。

8 一般研究発表 12月7日(日) 9:00~12:55

会場：日本大学文理学部キャンパス 百周年記念館2階 会議室2

座長：菅野 慎太郎（日本大学）

発表順	時間	発表者	演題
A1	09:00~09:20	沢井 大樹 (東海大学大学院)	筋力トレーニング実践者のライフスタイルに関する質的研究
A2	09:20~09:40	川井 高光 (筑波大学大学院)	男子大学剣道選手の競技的成長に関する一考察 —KJ法を用いた質的研究—
A3	09:40~10:00	相原 太郎 (東海大学大学院)	スキー愛好家の関与スタイルの検討 —語りによるモデル構築—

座長：川井 良介（日本大学）

B1	10:05~10:25	大原 沙智 (天理大学大学院)	大学女子競技選手における月経前症候群がウィングートテストによる無酸素性パワー発揮に及ぼす影響
B2	10:25~10:45	馬越 千里 (聖カタリナ大学)	剣道における女性と昇段に関する探索的研究

座長：北澤 太野（天理大学）

C1	10:50~11:10	千葉 寛樹 (日本大学大学院)	剣道授業の指導内容開発と展開 —教科指導に残存する種目主義の超克は可能か?—
C2	11:10~11:30	南方 隆太 (山梨学院大学)	野球の普及振興施策の策定に向けた課題の検討 —競技に“触れる”から“する”までの過程に着目して—
C3	11:30~11:50	益川 満治 (弘前大学)	ボールゲーム授業における「状況を見立てる力」を可視化する OODAループ学習カードの開発

座長：阿部 弘生（仙台大学）

D1	11:55~12:15	堀川 峻 (環太平洋大学)	佐藤卯吉の剣道論にみられる思想的展開 —「国民体育」振興との関連に着目して—
D2	12:15~12:35	楊 紅梅 (筑波大学大学院)	明治初期における東京大相撲協会の形成
D3	12:35~12:55	鉄 多加志 (東海大学)	日本における素潜り漁と関連する文化の考察

【発表者・座長へのお願い】

- ・発表者は、ご自身のPCを使用できます。また、大会実行委員会にて、RGB、HDMI、USB-C等の接続端子をご準備させていただきますので、発表前には必ず、接続のご確認をお願いいたします。

※大会実行委員会でも発表にご使用いただけるPCを用意いたします。

- ・配布資料は50部程度ご準備ください。
- ・発表者の持ち時間は20分（発表時間が15分、質疑応答5分）です。

※発表開始後14分でベルを1回、発表開始後15分でベルを2回、質疑応答開始後5分でベルを3回鳴らします。

※発表者の入れ替え時間は設けておりませんので、発表者はスムーズな演者の交代にご協力ください。

筋力トレーニング実践者のライフスタイルに関する研究

○沢井大樹・井上涼（東海大学大学院） 松本秀夫（東海大学）

I. 研究背景・目的

近年、コロナ禍における運動不足からくる健康志向やインフルエンサーなどの影響を受けて、フィットネス業界は急速な拡大みせている。笹川スポーツ財団（2024）の調査によると、筋力トレーニングを実施する人口は、2000年から2024年にかけて7.3%から15.9%へと増加し社会的動向を受けたフィットネス業界の盛況がうかがえる。例えば、SUMMER STYLE AWARD や APF（Asia Physique Federation）等の団体が設立、大会が行われて老若男女がフィットネスに専念する環境が構築されている。他にも、筋肉タレントや筋トレインフルエンサーなどが台頭し、ストイックなライフスタイルや筋力トレーニングなどが話題を集めている。しかし、その多くはボディビルダーである。堀田ら（2023）は、ボディビルへと専心する人々は、「筋肉は裏切らない」という心的態度を形成することを通して、「ボディビルへと専心すればするほど自身の生活、そして人生の意味が秩序化されていくことが専心していく論理であろう」と報告している。このようにボディビルダーは、筋力トレーニングに専心する中でライフスタイル、心的態度を形成していると考えられる。

一方、筋力トレーニング実践者の中には、身体の美しさや理想のアウトラインを求めて筋力トレーニングを行うフィジーカーも存在している。フィジークは、サーフボードが似合う綺麗な姿を求められサーフパンツを着用してコンテストが行われる。審査は、上半身を中心とした全身のアウトラインの綺麗さが求められ、過度な筋肉の発達減点対象となる。つまりフィジーカーに求められる身体は、ボディビルダーとは異なり、筋力トレーニングを行う過程で形成されるライフスタイルや心的態度にも違いが想定される。これまでフィジーカーのライフスタイル等に着目した研究は見当たらず、ボディビルダーとの比較を行うことは非常に意義があると考えられる。

本研究では、「筋力トレーニングへの専心度合によって、形成されるライフスタイルと心的態度は異なるのか」を明らかにすることを目的として、筋力トレーニング実践者のライフスタイルに着目した質的研究を行う。

II. 研究方法

本研究は、機縁法によりボディビルダー3名・フィジーカー6名の計9名を調査対象とした。30分～1時間程度の半構造化インタビューを行い、ライフスタイルと筋力トレーニングに関する発話を求めた。インタビューはICレコーダーで録音し、録音からテキスト化した。分析は、佐藤郁哉（2008）の質的データ分析法を採用し、テキストデータを基に研究実施者がコーディング及びコード化（概念カテゴリー化）を行い、データを細分化し現れるパターンやテーマを把握するように努めた。なお、本研究は、東海大学「人を対象とする研究」倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号:25082）。

III. 結果及び考察

本研究の目的は、筋力トレーニングへの専心度合によって、形成されるライフスタイルと心的態度は異なるのかを明らかにすることであった。分析結果として、オープンコーディングにより、11個の焦点的コードを抽出し、5個の概念的コードを生成した。分析に利用した、事例コードマトリクスは、フィジーカーとボディビルダーのライフスタイルと心的態度を比較するために6名のフィジーカーのデータを基に作成した。

生成された概念的カテゴリーは、【ライフスタイルの変容】、【身体の変容】、【心的態度の変容】、【交流】、【その他】の5個であった。【ライフスタイルの変容】では、〈ワークライフバランス〉〈生活環境〉〈食事の管理〉が焦点的カテゴリーとして挙げられ、トレーニングの開始と定着によって食生活が変容したことや学生時代と異なり仕事と両立することが趣味的な位置づけとして生活への影響を与えていることが発話から見られた。

【身体の変容】では、〈身体的危機〉〈コンプレックス〉では、運動の機会を失ったことによる身体への不満から筋力トレーニングを始めた事例や抱えていたコンプレックスの克服をしたという発話がみられ、筋力トレーニングが習慣として根付いていく様子が伺えた。

【心的態度の変容】では、〈自信の獲得〉〈対人承認〉が挙げられ、トレーニングを開始したことによる心的態度の変化からが起因していると考えられる、対人関係が良好になったことや生活の充実が語られていた。

【交流】では、〈SNS〉〈トレーニングの仲間との繋がり〉が挙げられ、SNSを通してインフルエンサーやビルダーに憧れた経験から筋トレに専心する態度を形成していたことがうかがえる。また、筋トレという趣味を通して、新たに人とのつながりが生まれたことから交流が広がっていったことが語られている。

【その他】では、〈憧れの存在〉〈競技転向〉〈ボディビルへの考え〉では、それまでなんとなくトレーニングを行っていたものが、トップビルダーに憧れを抱いたことでモチベーションとライフスタイルが変化したことを述べている。また、競技転向については、きっかけは様々であるが、運動部で活動していたものが補助的意味でトレーニングを始めたが、気付けばトレーニングが第一の目的となり生活が変容していく様相が伺えた。

以上の結果から、フィジーカーのライフスタイルはこれらのカテゴリーの影響を受けて形成されていることが考えられる。中には、フィジーカー特有のカテゴリーであると推察されるものも存在した。特徴的であったのは、【ライフスタイルの変容】における、焦点のカテゴリー内には、「1点目がカロリーを気にするようになった。(中略) 実家のご飯は食べれないというか、自分で作ってという感じになりました。(中略) トレーニングは優先度高かったけど、人生を豊かにする手段(中略) 趣味の範疇やから、トレーニングで飯食っていけるわけでもないから、普通に楽しくやるっていうのに、」という発話があるように、フィジーカーもライフスタイルを変容させてく様子がうかがえる。しかし、ボディビルダーでは、身体の反応に従った生活の規律²⁾ がされており、フィジーカーが生活を第一としてライフスタイル形成している部分とは異なると考えられる。

他には、ボディビル同様の態度を形成しているカテゴリーも存在していた。【心的態度の変容】では、Cは、「やる分だけ成果が出る。(中略) やるだけ結果がついてくるスポーツだと思って、やっぱ自信がついたかな。」と発話がみられ、ボディビルダーについての報告(堀田・松尾, 2023)と同様に身体が形成されていく中でフィジーカーにも心的態度が形成されていると考えられる。

最後に、〈ボディビルへの考え〉では、「A: すごいカッコいいなとは思うんですけど、働きながらできるところっていうところは少し考えて」、「C: あそこまで脚トレそれを追い込めない。ボディビルの人みたいに。だから、俺マジ尊敬する。」といった発話があったようにフィジーカーの中には、ボディビルへ挑戦したいという考え、尊敬の様子がみられた。しかし、筋力トレーニングに専心することで、仕事との両立の困難さや高負荷トレーニングが生活への負担となることが述べられており、極端な筋力トレーニングは、新たなライフスタイルの構築とはなるが、コミュニティや他者、社会的なつながりを顧みず、ライフスタイルの破綻を招いてしまう可能性も考えられるだろう。

本研究の結果から、フィジーカーは生活を第一として社会とのつながりやコミュニティを優先するといったライフスタイルと心的態度を形成していると考えられる。

IV. 今後の展望

竹崎(2015)は、高齢者ボディビルダーは老いを「異常な状態」とであると捉えていることを報告しており、本研究の比較検討と同様に高齢者フィジーカーについて調査する必要性が挙げられる。フィジークにおいても40歳以上のマスターズ大会が開催されており、大会に参加する競技者にも注目する必要性が挙げられる。今後は、マスターズ大会等に参加するフィジーク選手への半構造化面接を行い、時間の経過による身体の変化からライフスタイルの変容と心的態度にどのような影響を及ぼしているのかを捉えていきたい。

男子大学剣道選手の競技的成長に関する一考察
—KJ法を用いた質的研究—

○川井高光(筑波大学大学院)、鍋山隆弘・有田祐二(筑波大学)

1. 研究の背景と目的

剣道競技において、幼少期から青年期まで一貫して各年代の全国大会で入賞し続けることは容易ではない。そこには競技技術や専門的知識だけでなく、心理的要因や環境的要因など、さまざまな側面が複雑に影響している。特に高校剣道は、学校ごとに指導方針、稽古環境、稽古の質や量に大きな違いがみられる。一方、大学剣道では、専門性の高い指導者の存在、技術レベルの高い選手同士が鍛錬し合う環境、さらには学校によっては、授業として剣道が取り入れられることもあり、高校時代よりも競技に対して専門的かつ体系的に取り組むことが可能となる。このことから、大学期の競技経験は高校期以上に選手の競技的成長を促す可能性があると考えられる。このように、高校から大学への移行期は剣道選手にとっての重要な成長の機会となり得るが、どのような要因が競技的成長につながるのかを具体的に示した研究は多くない。したがって、質的研究の観点から剣道選手の競技的成長に関する要因を明らかにすることには、今後、剣道選手を対象とした質的研究を進めていく上で、大きな意義があると考えられる。

本研究では、対象とする2名の現役男子大学剣道選手が、高校時代には全国大会個人部門で入賞できていなかったにも関わらず、大学在学時に全国大会個人部門で入賞を果たした背景にはどのような要因が関与しているのかを、質的に明らかにすることを目的とした。特に、競技的成長に寄与したと考えられる戦術的要因、心理的要因、稽古環境や指導に関する要因、さらには選手にとって転換点となった要因に着目する。これらの要因について、収集したデータをKJ法によって整理・構造化し、選手が競技的に成長していく過程を多角的に捉えることを試みる。また、本研究を通して、大学剣道選手の成長プロセスの理解に資する知見を得ることを目指す。

2. 研究方法

対象者は、大学剣道部に所属し、大学在学時に全日本学生剣道選手権大会で入賞経験を有する男子大学剣道選手2名とした。この対象者2名は、高校在学時に全国高等学校体育大会剣道競技の個人の部で入賞経験はなかったため、大学進学後に競技成績を大きく向上させた選手であると考えられる。対象者には、本研究の趣旨を説明した後、半構造化インタビューを実施し、自由記述式での回答を求めた。調査項目は高校・大学在学中、それぞれの得意技と戦術、大学進学後に成績を残せた要因等についての回答を求めた。インタビュー内容は音声を録音し、データを逐語録として整理した後、語りの意味・内容を崩さないように文脈を尊重しながら内容をまとめることとした。語りの内容の妥当性と信頼性を保証するため、対象者にメンバー・チェックを依頼し、対象者ごとにテキストとして再構成した。

テキストの分析には KJ 法を用いた。再構成したテキストから意味として通ずる内容を単位としてラベル化した後、内容の類似性や関連性に基づいてグループ化を行った。続いて、カテゴリ間の関係性を整理し、選手の競技的成長に関係する要因を構造的に把握した。その際、語りの内容から小カテゴリを生成し、その小カテゴリから中カテゴリを生成し、最後に中カテゴリから大カテゴリを生成した。

3. 結果

KJ 法による分析の結果、2 名の対象者に見られたカテゴリは「戦術的要因」、「心理的要因」、「重要転機要因」、「環境的要因」の 4 つが生成された。以下の表 1 と表 2 は、本研究において KJ 法を実施した結果をまとめた表の一例である。詳細な考察は、学会大会時に発表する。

表 1 対象者 A の大学生時代の戦術的要因と心理的要因の例

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	語りの例
戦術的要因	攻撃戦術	勝負を仕掛ける	時間内で勝負をする
			決められた試合時間の中で勝負を仕掛ける
心理的要因	ポジティブ	楽観	大学生になってからの試合は気楽にできている
			自分から打ちに行っても取られても、取り返せばいいやという気持ちを持っている

表 2 対象者 B の大学生時代の戦術的要因と重要転機要因の例

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	語りの例
戦術的要因	攻撃戦術	得意技	最終的には面を打つ
			面を打つことが多いのは得意だから
重要転機要因	きっかけ	手応え	ある程度の手応えを感じた
			跳び込み面がボンボンと当たるようになったのが手応えを感じた

スキー愛好家の関与スタイルの検討 ―語りによるモデル構築―

○相原 太郎 井上 涼（東海大学大学院） 松本 秀夫（東海大学）

I. 研究背景と目的

本研究で対象とするスキーは、自然景観の中での活動であり、潜在的人口が世界で 1.3 億人の人気のあるレジャー活動であるため、多くの人々にとって重要な余暇活動となっている。

筆者は、国内スキー愛好者全体を対象に幅広いデータを収集し、指導者を含む一部の愛好者が特に高いレジャー関与を有する可能性が示唆された。本研究では、指導者もスキーを趣味として楽しむ愛好者であるという側面に着目し、スキー愛好者全体の中の特定のサブグループとして位置づけている。また、指導者は一般の愛好者と同様にスキーを楽しむ一方で、競技指導や教育的活動といった特有の役割を担っており、その経験がレジャー関与のあり方に影響を与えている可能性がある。これらの知見を踏まえ、本研究ではレジャー関与が高いと考えられる愛好者に焦点を当てた。松本らは、レジャー・スポーツ活動を長期に継続し専門志向化した人々は、活動の中でより充実感や満足感を得る傾向があることを報告している。

そこで本研究では、スキー愛好者のレジャー関与がどのような内的構造や価値観によって支えられているのかを明らかにすることを目的とした。そのため、多様な関与のあり方を質的に分類し、主要な関与軸を抽出した上で、スキー愛好者の関与スタイルを構造的にモデル化することを試みた。

II. 調査対象及び研究方法

本研究では、スキーを長期的に実践する愛好者の関与スタイル明らかにするため、半構造化インタビューによる調査を行った。

対象者は理論的サンプリングを意識し、機縁法により愛好者および指導者の中から代表的なサンプルを選定した。長期的な継続実践を前提とするため、18 歳未満は除外した。対象者の属性は表 1 に示した。調査は 2024 年 8 月～2025 年 8 月に実施し、十分なインフォームドコンセントを得たうえで同意書に署名を求め、了承を得て IC レコーダーで記録した。インタビュー時間は 30 分程度で、場所はホテル等、またはオンライン（Zoom・Google Meet）とした。なお、本研究は東海大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した。(25080)

インタビュー項目は、スキーに対するレジャー関与に関する内容を中心に、スキー経験（開始動機・時期・場所・継続年数）および属性情報（性別、年齢、家族構成、居住地、出身地）を含めた。また、対象は愛好者、指導者の中で代表的なサンプルを選定した。

また、半構造化インタビューにより得られた発話を IC レコーダーで録音し、逐語的に文字起こしを行った。得られたテキストデータについては、佐藤郁哉(2008) の『質的データ分析法』に示される「事例―コードマトリクス」に基づき分析した。まず逐語録を精読し、発話の意味内容に応じてセグメントを切り出し、オープンコード化を行った。オープンコーディングでは、テキストデータそのものからコードを立ち上げ、記述内容に即した初期コードを形成した。次に、コード間の関連性や文脈的なつながりを検討し、複数のコードを統合する形で焦点的コーディングへと移行した。さらに、それらの焦点的カテゴリーを抽象化し、上位の概念コードへと統合した結果、最終的に 3 つの主要概念が抽出された。これら 3 つの概念は「有／無」の二値で捉えることが可能であり、その組み合わせから関与スタイルが導出された。

また、分析過程では、質的研究の実績を有する研究者とトライアンギュレーションを行い、分析の信頼性を確保した。

Ⅲ. 結果及び考察

テキストデータから焦点的コードを抽出し、それらを統合する過程で概念的コードが3つ生成された。統合された概念的コード(自然・技能・コミュニティ)は以下のように命名した。

【自然体験型】：〈自然景観・身体感覚〉〈非日常性・特別感〉〈地域性・文化性〉

【技能追求型】：〈道具へのこだわり〉〈技術向上と達成感〉〈学びと成長の継続〉〈競技志向と目標達成〉〈指導と通じた学びと喜び〉

【コミュニティ重視型】：〈人生・生活基盤としてのスキー〉〈顧客・指導を通じた関係性〉〈家族との交流〉〈人的つながり〉〈アフタースキー文化〉

さらに、抽出された3つの概念的コードの有無・組み合わせに基づき、スキー愛好者の関与スタイルは $2^3=8$ 通りに類型化され、表2のように命名した。

Ⅳ. まとめ

本研究では、スキー愛好者の語りから抽出されたテキストデータを事例ーコードマトリックスにより整理し、3つの主要な概念的コードを生成した。さらに、それらの有無・組み合わせに基づき、8つの関与スタイルが理論的にモデル化された。その結果、多様な関与スタイルが確認され、スキーが単なる余暇活動を超えて、多様かつ複合的な関与スタイルで把握できることが明らかになった。

一方で、本調査では主要概念(自然・技能・コミュニティ)への明確な関与は認められなかったものの、主として健康の維持・増進を目的としてスキーを行う「健康志向型」は1名に留まった。しかし、このタイプをモデルに含めることは、スキー関与の多様性をより包括的に理解し、スキーが持つ健康促進的側面を位置づけるうえでも意義があると考えられる。

以上より、本研究は、スキー愛好者の関与を「自然」「技能」「コミュニティ」という三層構造から説明し得ることを示すとともに、その相互作用から多様なスタイルが形成されることを明らかにしたといえる。また、このような枠組みは、スキーの普及施策や教育的活用において、対象者の関与スタイルに応じたアプローチを検討するための理論的基盤を提供し得る。

表1 対象者の属性

対象者	年齢	性別	区分	家族構成	居住地	出身地	経験年数	
A	↑	50-60	女性	愛好者	既婚。子あり	東京都	東京都	30年以上
B	↑	30-40	男性	愛好者	独身	甲信越	北関東	20年以上
C	↑	50-60	男性	愛好者	既婚。子あり	東京都	東海	40年以上
D	↑	50-60	男性	愛好者	既婚。子なし	東京都	北陸	40年以上
E	↑↑	20-30	男性	愛好者	独身	東京都	東北	20年以上
F	↑↑	20-30	男性	愛好者	独身	東京都	北関東	20年以上
G	↑↑	20-30	男性	愛好者	独身	東京都	北関東	20年以上
H	↑↑	20-30	男性	愛好者	独身	東北	東北	20年以上
I	↑↑	20-30	男性	指導者	既婚。子なし	甲信越	東北	20年以上
J	↑↑	40-50	男性	指導者	独身	北海道	北海道	40年以上
K	↑↑	60-70	男性	指導者	既婚。子あり	東京都	甲信越	60年以上
L	↑↑	30-40	女性	指導者	独身	甲信越	甲信越	30年以上
M	↑↑	40-50	女性	指導者	独身	北関東	東京都	40年以上
N	↑↑	40-50	男性	指導者	既婚。子あり	北関東	北関東	30年以上
O	↑↑	20-30	女性	指導者	独身	北海道	東海	20年以上
P	↑↑	30-40	女性	指導者	独身	東北	東北	20年以上
Q	↑	70-80	男性	愛好者	既婚	甲信越	甲信越	30年以上
R	↑↑	60-70	男性	指導者	独身	東京都	甲信越	40年以上
↑対面インタビュー		↑↑オンラインインタビュー						

↑対面インタビュー ↑↑オンラインインタビュー

表2 関与タイプモデル

タイプ名	自然体験型	技能追求型	コミュニティ重視型	概要
総合関与者	○	○	○	自然・技術・人間関係のすべてに高関与を示す中核的存在
自然・技能志向型	○	○	×	自然と技能に強い関心を持つが、対人関係への関与は限定的
自然・交流志向型	○	×	○	自然体験と人との関係性を重視。技術的志向は限定的
自然特化型	○	×	×	自然とのふれあいやリフレッシュを主目的とした関与
技術・交流志向型	×	○	○	技術の追求と対人関係に重きを置く指導的・実践的タイプ
技能特化型	×	○	×	技術向上を主目的とし、個人の達成感や挑戦を重視
交流特化型	×	×	○	スキー活動を通じた人間関係や社会的つながりに関与
健康志向型	×	×	×	特定の軸に明確な関与が見られず、健康のための活動という認識

大学女子競技選手における月経前症候群がウィングートテストによる無酸素性パワー発揮に及ぼす影響

大原沙智¹⁾，中谷敏昭^{1,2)}

¹⁾ 天理大学大学院体育学研究科，²⁾ 天理大学体育学部

I. はじめに

月経は，思春期から閉経に至るまでの期間に女性に生じる生理現象であり，身体的・精神的変化を伴う周期的な現象である．多くの女性は，月経周期に伴う体調の変化を経験しており，特に月経前症候群（PMS）は，月経前 3～10 日間に出現する多様な身体的・精神的変調を指す．症状は，腹痛，倦怠感，抑うつ気分，集中力の低下など，競技パフォーマンスに影響を及ぼす可能性が指摘されている．多くの女子競技選手は，月経周期に伴う心身の不調や健康上の不安を抱えながら競技生活を続けており，それが競技力向上の障壁となっている（土肥，2017）．また，陸上競技選手を対象とした研究では，カウントームーブメントジャンプおよびリバウンドジャンプ能力への影響が報告されている（門馬ら，2021）．本研究では，PMS の症状を有する大学女子競技選手を対象とし，PMS の有症期（PMS 期）と症状が消失した無症状期（N-PMS 期）において自転車エルゴメーターによる全力ペダリングテストを行い，PMS が無酸素性パワー発揮に及ぼす影響を検討することを目的とした．

II. 方法

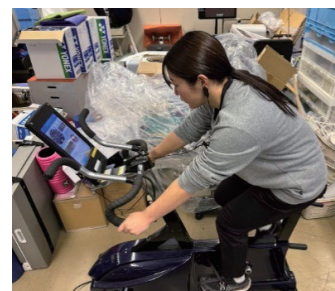
健康な女子大学生 54 名（19～22 歳）をスクリーニング対象者とし，本研究の趣旨および危険性について十分説明した上で，全員から研究参加への同意を得た．これらの者に対し，PMS 症状の有無，コンディションの状況，健康状態，症状の種類および程度を把握するための調査を実施した（日本産婦人科学会/日本産婦人科医会，2023）．その結果，ACOG（2014）の基準を満たした PMS 有症者 8 名を抽出し，本研究の対象者とした．これらの者は，月経周期が規則的（25～38 日），過去 6 か月間にホルモン療法や経口避妊薬を使用していないことを確認している．また，循環器系疾患や測定に影響をおよぼす障害等を有していないことも確認した．月経周期の把握には婦人体温計（MC-652LC-PK，オムロン製）を用い，対象者自身に基礎体温を毎日記録させた．さらに，症状や薬剤服用の有無なども日誌を記録させた．無酸素性パワー発揮の測定には，高精度エルゴメーター（風神雷神，大橋知創製）を用い，30 秒間の全力ペダリング（ウィングートテスト：WGT）を行った．WGT の測定項目は，最大回転数，ピーク到達時間，ピークパワー，平均パワーおよび対ピーク比であった．ピークパワーは平均パワーを

表 PMS の診断基準（ACOG，2014）

①	過去の3回の月経周期において，それぞれの月経開始前5日間に精神症状（抑うつ，怒りの爆発，いらだち，不安，混乱，引きこもり）および身体症状（乳房圧痛，腹部膨満感，頭痛，四肢のむくみ）を1つ以上有すること
②	①の症状は月経開始後4日以内に軽快し，13日目まで再発しないこと
③	①の症状は薬物やアルコールの使用によるものでないこと
④	症状はその後2周期にわたり①の症状が繰り返し起こること
⑤	①の症状による社会的・経済的機能の障害が確認されることであり，5つの基準を全て満たした場合にPMSと診断される

PMS, premenstrual syndrome.
Guidelines for women's health care. A resource manual, 4th edition.
ACOG, American College of Obstetricians and Gynecologists.

対ピークパワーで除して算出した。また、ピークパワーと30秒終了時点のパワー値を用いて疲労指数を算出した。測定は、同一対象者に対してPMS期（月経開始前3~10日）およびN-PMS期（無症状期の卵胞期）にそれぞれ実施した。PMS期は本人の基礎体温記録および自覚症状から判定し、N-PMS期は月経終了3日後に統一した。測定当日には、体調および気分の調査（POMS）、安静時の血圧、脈拍数、血中乳酸値を測定した。また、WGT終了直後には、同様の項目と自覚的運動強度（RPE）も測定した。統計解析にはWilcoxonの符号付順位検定を用い、PMS期とN-PMS期のデータを比較検討した。有意水準は5%であった。



Ⅲ. 結果および考察

WGTによって得られた最大パワーと平均パワーは、PMSの有無で有意な差はみられなかった。また、疲労指数についてはN-PMS期で高い傾向を示したものの、有意差には至らなかった。このことは、本研究対象である女子競技選手の無酸素性パワー発揮には、PMS症状の有無による大きな差は生じない可能性が示された。Giacomoniら（2000）は、月経周期の各フェーズにおける最大ペダリングパワー、最大ジャンプパワー、スクワットジャンプの跳躍高に有意差はなかったと報告しており、本研究と同様の結果であった。その理由として、無酸素性パワー発揮は短時間で行われるため、PMSに伴うホルモン変動の影響を受けにくいことが挙げられる。さらに、陸上競技選手を対象とした門馬ら（2021）の報告では、PMSは身体組成やカウントームーブメントジャンプ、リバウンドジャンプ能力に影響を及ぼさなかったが、特定の症状（乳房圧痛や不安）を有する者は、その症状がない者に比べて跳躍高とリバウンドジャンプ能力が大きく低下したとされる。このことは、PMSに伴う特定の症状が無酸素性パワー発揮に影響する可能性を示している。本研究においては、30秒間の全力ペダリングによるパワー発揮は、PMS期に低下を示す者、増大を示す者、変化がみられない者が混在しており、個人差が認められた。また、PMS症状があったとしても、30秒間の全力ペダリングにおいては、個々の精神的および生理的能力やコンディションの変化が生理反応として吸収され、直接反映されにくかった可能性も考えられる。この点については、本研究のPMS有症の対象者が少なかったため、今後は対象者数を増やすとともに、症状の種類や程度を考慮した詳細な検討が必要である。

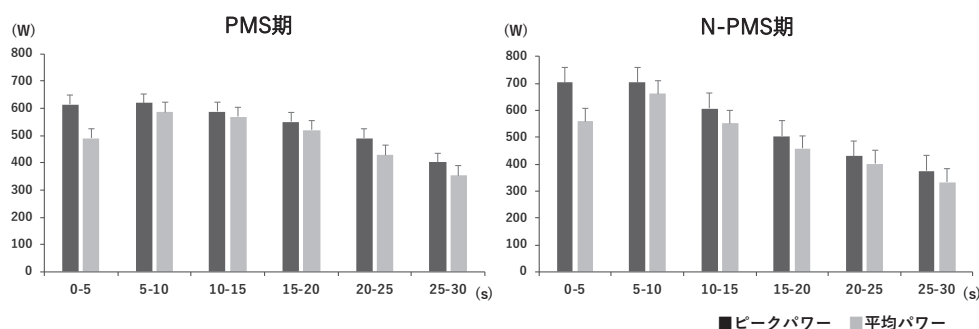


図 WGTにおける5秒毎のピークパワーと平均パワーの変化

剣道における女性と昇段に関する探索的研究

馬越 千里（聖カタリナ大学・東海大学大学院）

高尾 将幸・笹木 春光・天野 聡・松本 秀夫（東海大学）

1. 研究の背景および目的

剣道の段位制度は、剣道の「技術的力量（精神的要素を含む）を示すものとして、審査を経て授与される」とある（全日本剣道連盟, 1999）。また、武道では、技術水準や修行の成果を表すものとしての段級があり、こうした点が競技会で技術の優劣や勝敗を争うスポーツと違う特色であるとされる（藤堂, 2004）。その起源は、江戸時代の将棋や囲碁の段位制度にあるとされる。「段」や「級」の認定制度は、上達レベルを細分化し、可視化してくれることで、生徒の習得を動機づける手段として優れたものである（西山, 2025）。つまり、その人の技術的力量を誰に対して客観的にも示せるようにした機能をもつ制度といえる。剣道の段位制度は施行以来、今日まで男女共通の制度とされてきたが、この点は特に文言として明記されてはいない。この点については、他のスポーツあるいは同じ段位制度をもつ他の武道種目とは違う特徴的な部分でもある。全日本剣道連盟（以下、全剣連）が1952年に発足した当初、実践者はほとんどが男性であった（境, 2004）。また、なぎなた以外の武道種目において女性の関わりは付随的かつ追隨的であったとされる（大石, 2020）。2008年に全剣連が実施した剣道人口の調査では、女性の割合は全体の約4分の1、近年の有段者登録者数については全体の約3分の1となっている（全剣連, 2025）。近年では特に高段位とされる六・七段を受有する女性も着実に増加している。女性の実践者や高段位者の増加はそれぞれ剣道文化の変容の1つのフェーズと捉えることができる。また、それらが増えてきた背景には様々な社会的要因との関連が推測される。

本研究では、女性の高段位者の増加に着目し、女性の高段位者が昇段に至った経緯やそれを促した要因や昇段に関連するエピソードを収集し、その実態を明らかにする。さらに、剣道の段位制度が女性剣道実践者にとってどのような機能をもっていたのかについて、ジェンダーの視点も踏まえて探索的に研究する。

2. 研究の方法

日本国内に在住する女性の高段位者ならびに補足的に中段位者も含めた10名に対する半構造化インタビューを実施した。1人あたりの時間は約60～90分程度とし、必要に応じてフォローアップを行った。実施期間は、2024年1月～2025年8月であった。調査は、聖カタリナ大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 学倫 23-08）。インタビューデータは、逐語録に書き起こし、データ分析の一連の作業については佐藤（2008）の手法に則って事例-コードマトリックスを行った。

3. 結果

対象者の女性の語りを分析した結果、4の概念的カテゴリーと13の焦点的コードが生成

された。コーディングの結果を表1に示した。

昇段に至った経緯や要因に関連するものとして、段位や段位制度をどのように解釈しているのかについて聞き取りをした。これらに関する発話を概念的カテゴリー1. 技術的・内面的成長と2. 長期的活動・継続の目標とした。昇段への経緯や要因について、多くは周囲からの勧めであった。これを概念的カテゴリー4. 社会的関係維持・構築とした。また、指導者としての地位の確立や資格としての必要性を概念カテゴリー・3. 社会的承認・評価とした。

1990年～2005年の間に七段を取得した女性たちは共通してジェンダーの差を感じた体験や、剣道が男性優位であったことを示す発話した。その中で、当時は数少なかった女性の実践者や指導者としての責任感や使命感から昇段に至っていた。これらを概念的カテゴリー・3. 社会的承認・評価とした。

4. 考察

昇段に至った経緯やそれを促した要因については、活動環境や指導の関与の度合い、職業との関連性も高いと考えられるが、より深い考察をするために今後さらなる調査が必要とされる。女性剣道実践者にとっての段位制度がどのような機能をもつのかについて、概念的カテゴリー1. 技術的・内面的成長からは、全剣連が公表している「技術的力量（精神的要素を含む）を示すもの」との整合性が取れる。これらは段位制度の本来の機能でもある顕在的機能を示している。また、藤堂（2004）や西山（2025）の解釈との整合性も取れる。概念カテゴリー2. 長期的活動継続の目標からは、昇段が活動を継続する上での目標ともされていることから、長期的な活動の継続や修業を促進させる機能をもつことが示唆された。

概念的カテゴリー3. 社会的承認・評価については、段位制度の本来の機能とは異なる機能を示す要素で構成された。1960～1970年代から剣道を継続してきた女性たちは、剣道が男性優位とされてきたことを示す発話をしており、その中で女性としての剣道の技量の正当性を裏付けるものとして昇段に至ったとしている。このことから、剣道の段位制度は本来の機能である技術的力量や修行の成果を客観的にも示す顕在的機能とは異なる機能をもつことが示唆された。それは、女性の地位の確立の一助となる潜在的機能である。両機能が剣道の段位の価値を相補的に高め、女性の昇段を促す1つの要因となり、結果的に女性の高段位者が着実に増加してきたと推察される。

本研究はJSPS 科研費 JP23K10767 の助成を受けたものです。

表1. コーディングの結果

概念的カテゴリー	焦点的コード	セグメント具体例
1. 技術的・内面的成長	基本・技術の習得	技術レベルの向上 段位審査を通じて得られる技術の進歩
	自己評価と確認	自分の実力を試したい 客観的な評価を得たい 現在の技術レベルを確認したい
	精神修養	心の成長、精神的な修養を深めたい 人間形成、人間的成長を求める
	自己研鑽	自分の実力を試したい 客観的な評価を得たい 現在よりも技術レベルを向上させたい
2. 長期的活動・継続の目標	剣道継続の動機	稽古を続ける理由として 生涯剣道を続けるため
	年齢に応じた目標	ライフステージごとの目標として
	具体的目標	試合での勝敗とは違う目標として 次の段位を目指すモチベーション
	自己挑戦	自分への挑戦として 達成感を味わいたい
3. 社会的承認・評価	社会的地位の確立	段位取得による社会的評価を得たい 周囲からの承認を得たい
	女性剣道実践者としての地位の確立	ジェンダーによる差への抵抗 先駆者として貢献するため
	指導者としての資格	教える立場になるため 指導者として認められたい
4. 社会関係維持・構築	周囲の期待	先生・先輩・友人の勧め
	所属団体の要請	道場や組織からの要望

剣道授業の指導内容開発と展開
—教科指導に残存する種目主義の超克は可能か？—

千葉寛樹（日本大学大学院）

本研究は、学校体育における「武道」領域の授業について、剣道を題材としながら、指導内容の再構築に向けた前提的な考察を行なったものである。従来の剣道授業では「打つこと」を中心とした技術指導が主流であったが、その多くは身体動作の模倣や反復練習にとどまり、対人的な「関係」を扱う視点が欠落している。本発表では、剣道の本質を「試し合い」における関係構築として捉え直し、その教育的意義を検討することを目的とする。

まず、我が国の学校教育では、学習指導要領に沿って各教科の指導が行われているが、廣瀬・北川（1999）が指摘するように、学校体育においては全ての種目を直接体験することは現実的ではない。そのため、特徴の似通った種目をグルーピングし、典型事例として取り上げて指導することによって、一般化された概念形成を図ることが求められる。つまり、指導内容の精選は不可避の課題である。この観点から剣道を考えると、「打突」という目に見える動きの背景に、相手との駆け引きや呼吸といった心理的・戦術的要素が存在する。しかしながら、現在多くの学校で行われている授業では、個別種目の指導にとどまったケースが多いように思われる。これらの授業は、「面打ち」や「小手打ち」のような技の主要局面の動き方を身につける授業内容だということは容易に想像される。しかし、こうした動きは剣道特有のものであり、他の武道領域の種目で使われることは想定されない。つまり、剣道を武道という領域の一つの現れとして見立てるメタ的視点が欠落していることを示している。木原ら（2016）や中川ら（2017）はそれぞれ「打突の機会」や「相手との呼吸」に焦点を当てた授業実践を報告しているが、いずれも生徒の認識は「自分自身の動き方」という目に見える動きに留まり、内面的理解や対人的な関係構築に十分には至らなかったという。これらの課題を踏まえ、本研究では剣道の「試し合い」を、「暴力の調停」としての関係構築の場と捉える視点を提示する。

歴史的にみれば、武術から武道への転換は、殺傷技術の教育的再編成という意味を持つ。現在使われている武道という言葉は、元は実戦場面で用いる武術に由来する。戦国時代の武術は、戦場での生存が目的であり、刀や槍を使った殺傷の技法がその中心を成していた。藤堂（2018）が指摘するように、殺傷を目的とした武術の時代が終わり平和な時代を迎えると、時代の変化とともに武士の社会的役割は社会秩序を正すことに変化した。敵を殺傷することを目的として発展してきた戦闘技術は「痛みを軽減しつつ美しく気持ちのよい一本を求めて競い合う」という、平和的共存を志向する身体運動文化へと再構成された

(小山, 2012)。したがって、剣道授業においても、単なる身体技法の教授・伝達ではなく、「いかに相手と関係を結び、優位に立つか」という課題が中核となる。

剣道では、「生きること」をシンボル化し、有効打突として価値づけることによって繰り返し試し合いを行えるように加工・創生してきた。シンボル化とは、剣道の打突部位である4箇所を「打突されたら戦闘不能になる身体部位」と見立て、いずれかの部位を十分な体勢で打突することをもって、相手を制することに成功したと意味付けることを指す。かかってくる相手の暴力性を制し、無力化が叶った証として有効打突に価値を付与することによって、剣道を、平和的共存を希求する一つの身体運動文化として育て上げてきたのである。つまり、武道という領域は自ら相手に攻撃を加えて討伐するのではなく、自身に危険が及んだ際に安寧を保ち、状況の中に身を置くための身体技法として発展してきた文化と解される。こうして、平和な社会の中で危険から身を守り暴力を調停することを目指す身体技法を繰り返し修練できるよう制度化してきたことが、現代社会における武道の存立契機となっている。

また、他の領域と武道との特筆すべき違いとして、試し合いの結果に至るまでの過程を重視しているという点が挙げられる。球技やフェンシングなどのような他の判定スポーツでは、累積したポイントの多寡こそが最大の価値であるのに対し、武道では結果に至るまでの過程、いわば「生き様」こそが重視され、判定においても過程のありようが多く加味される。結果に至るまでの過程を重視し、価値づけをしていったということも、武道が独自の文化として発展してきた証だと考えられる。

これらのことから、剣道で試し合っているのは、いかにして相手との間柄を編み直し、自身の身の安寧を保つかという関係構築の能力だと言える。したがって、打突の実行・完了をもって勝敗が決まるのではなく、打突の前に行われている竹刀を介した相手とのやり取りの段階ですでに決着しているという理解になる。特に、体育授業における剣道では、打ち方や竹刀が打突部位に当たったかどうかという目に見える動きだけを大切にするのではなく、相手との関係構築という武道の一般理論を大切にする必要がある。

ちなみに、打突の前に行われているせめぎ合いを通じて関係が構築されていく場面を、中嶋(2017)は、「中間局面」と表現している。この中間局面で優位に立つことこそが、武道における関係構築であり、体育授業で武道を取り扱う最大の価値であるということができる。

以上を踏まえ、本研究では、剣道を単なる種目としてではなく、「相手の存在を前提とする身体知の学び」として捉え直す必要性を提起する。

野球の普及振興施策の策定に向けた課題の検討
ー競技に”触れる”から”する”までの過程に着目してー

南方隆太（山梨学院大学）

1. はじめに

日本のスポーツ政策の中で、スポーツ人口の拡大は重要な政策課題となっている。しかし、第2期スポーツ基本計画（2017）で示されたスポーツ人口の数値目標はほとんど達成できていない状態にあり、2022年に策定された第3期スポーツ基本計画では、スポーツ人口の政策目標達成のために、スポーツ実施の頻度が週1回に満たない層とスポーツ非実施層へのアプローチの必要性が示された。

競技統括団体においても新たな競技人口の獲得は重要な政策課題となっており、近年著しい競技人口の減少局面を迎えている野球競技では喫緊の課題となっている。野球競技統括団体は競技人口拡大に向けて、子どもや未経験者が野球に触れる機会の拡大を政策課題に設定し、保育施設や教育機関への訪問活動の回数や観戦招待の人数を増加させている（日本野球協議会：2025）。その効果として、日本野球機構が統括するセントラルリーグ及びパシフィックリーグから構成されるプロ野球の公式戦入場者数は増加傾向にあり、野球に触れる人口の拡大には成功しているように思われる。しかし、野球競技統括団体に所属する選手数は依然として減少傾向にあり、野球に“触れる”から競技として“プレーする”までの過程を踏めていないことが指摘できる。以上の問題を認識し、本研究では野球に“触れる”から“する”までの過程に着目し、競技人口の拡大を目的とした野球の普及振興施策の課題を明らかにしたいと考えた。

新たな競技人口の獲得のためには、未就学児や小学校低学年に対するアプローチが重要となる。子どものスポーツ参加には保護者が重要なファクターとして関わっていることが指摘されており（ベネッセ総合研究所：2007, 2017）、野球競技においても家族の存在が野球競技への参加の第一の要因として明らかにされている（石山・久崎：2012）。他方で、子どものスポーツ参加を阻害する主な要因として親の負担が大きいことが報告されている（笹川スポーツ財団：2017）。これらのことから、子どもの野球を競技としてプレーするまでの過程には保護者の意思決定も深くかかわっていることから、本研究では子どもと保護者の両側面から野球の普及振興施策の課題を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

以上の問題の所在並びに先行研究の検討から本研究では、野球の普及振興施策の策定に向けて、子どもの野球に触れるから競技としてプレーするまでの過程に着目して、野球競技への参加を阻害する要因について明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、横浜 DeNA ベイスターズが主催する野球普及振興事業「B-PARK」参加者（子ども 240 名、保護者 240 名）に対してアンケート調査を実施した。子どもに対する調査では、①野球経験の有無、②野球への好感度、③学童クラブへの加入意志とその理由を、保護者に対する調査では、①保護者のベースボール型スポーツの競技歴、②子どもの学童クラブ参加に対する保護者の意思、③子どもが学童クラブへ入団するにあたって懸念すること、④学童野球に対するイメージをそれぞれ調査した。

4. 結果及び考察

子どもの回答者 240 人のうち 117 人が競技として野球をプレーしたことが無いと回答し、プレー経験が無い子どもほど公園等でのキャッチボールの経験が少なく、また学童クラブへの入団意志も低い傾向にあった。公園等でのキャッチボールの経験について、回答者の 19%が公園等でキャッチボールをしたことが無いと回答しており、野球要素のある遊びをする機会が失われている現状が指摘できる。次に、学童クラブへの入団意志について、25%の回答者が学童クラブに入って野球を「したくない」または「あまりしたくない」と答えており、クラブへの入団が一つのハードルとなっている結果となった。

保護者の回答者 240 名の競技経験は、「父のみ経験あり」が最も多く（53%）、次いで「父と母どちらも経験無し」（37%）が多かった。「子どもが学童クラブに入団し野球をプレーすることを望んだ場合、子どもを入団させてあげたいと思いますか。」の質問に対し、51%の回答者が「思う」と回答し、「少し思う」（30%）、「どちらでもない」（13%）、「思わない」（4%）、「あまり思わない」（2%）の順であった。約 80%の保護者が肯定的な意思を示した一方、子どもを「入団させたくない」と思う保護者も一定程度存在した。次に、子どもを学童クラブへ入団させるときに懸念することとして「チームの雰囲気」（18%）が最も多かったが、保護者の負担に関する 3 項目を合計すると約 30%にものぼり、保護者が最も懸念する材料となっていた。保護者が学童クラブに抱くイメージを自由記述で尋ねた結果、保護者の負担が大変だというイメージが最も大きく、学童クラブは保護者が大変というイメージが根付いている現状にある。こうした状況は学童クラブの情報不足が原因として考えられ、よりオープンな活動形態が望まれる。

5. 結論

野球競技に触れるからするまでの過程における野球の普及振興施策の課題として、第一に、学童野球クラブの活動形態がライフスタイルの多様化や共働き世帯の増加が顕著な日本の社会情勢にそぐわない状況となっていることが挙げられ、社会の変化に沿った学童クラブの活動形態の改善が求められる。第二に、野球に触れる過程においても、野球を「観る」から「する」までの過程に障壁があり、野球を観戦し、野球に興味を持った子どもが野球をできる環境の整備が必要となることが指摘できる。

ボールゲーム授業における「状況を見立てる力」を可視化する

OODA ループ学習カードの開発

益川満治（日本大学文学研究科博士後期課程，弘前大学教育学部）・渡邊陵由（八戸学院大学健康医療学部）

1. 緒言

わが国の学校体育におけるボールゲーム指導では，学習指導要領において「型」による内容の提示がなされ，種目群全般に通じる原理や概念の理解を促すことが求められている．しかし，実践現場では依然として個別種目の技能習得を中心とした反復練習が重視され，学習者を知識の受動的な受け手として位置づける指導が少なくない．近年，TGfU や TGA など戦術的気づきを重視する指導方法が提唱されてきたが，修正されたゲームが特定種目のパフォーマンス向上に偏りやすく，種目横断的な能力の育成には繋がりにくいこと，また学習の順序性を前提とした線形学習となる傾向があることが指摘されている（益川，2025）．

このような課題に対し益川（2025）は，ボールゲームの学習本質は技術の蓄積ではなく，学習者が「状況を見立て」「参加の調整」を行い，他者との「関係づくり」を通じて意味のあるプレーの共構成に能動的に寄与する能力の育成にあるとしている．ここで言う「状況を見立てる」とは，身体的・対人的・空間的な要素を含んだ複合的な洞察であり，自らを包み込む状況にどのような意味を見出すかという関係論的な営為である．従来の指導では教師の指示が「正解」として提示されてきたが，実際のゲームでは刻々と変化する状況の中で学習者自身が即興的に判断し，他者との関係の中で自らの行動を選択していくことが求められる．しかしながら，このような主体的・探究的な学びを支える評価方法は確立されていない．

そこで本研究では，OODA ループの枠組みを用いた学習カードを開発した．OODA ループは，観察（Observe），状況判断（Orient），意思決定（Decide），行動（Act）という一連の意思決定過程を示すモデルであり（リチャーズ，2019），学習者が自ら「状況を見立て」探究的に課題を発見し解決していく本研究の授業実践と適合性が高い．本研究の目的は，OODA ループを用いた学習カードによる振り返りを通じて，学習者の「状況を見立てる力」がどのように涵養されていくかを明らかにすることである．

2. 方法

対象は，H 大学教養授業を履修した学生 30 名とした．調査は全 15 回のボールゲーム授業において第 2 回から第 4 回に実施したネット型ゲームを対象とした．本授業は，学習者が自らの役割を見出しながら段階的に参加の度合いを深めていく「参加の調整」を取り入れた．授業後，学習者に OODA 学習カードを配布し，(1) Observe（観察），(2) Orient（状況判断），(3) Decide（意思決定），(4) Act（行動）の観点で自由記述を求め，質的検討を行った．

3. 結果と考察

第2回目では、Observe 領域において「ボール」「相手」「味方」「位置」などの可視的対象を指す語彙が頻出し、ゲーム状況を個別的・断片的に捉える傾向が見られた。Orient 領域では、物理的距離や速度に関する表層的な判断が中心であり、Decide・Act 領域では、具体的な意思決定や行動の記述は少なく、消極的な反応も見られた。第3回目では、Observe 領域において「スペース」「動き」「タイミング」など、関係性を示す語彙が増加し始めた。Orient 領域では、因果関係や分析的なコメントを含む記述が出現し、状況認識と判断の結びつきが強化され始めた。Decide・Act 領域では、意思決定や行動の選択がより具体的になり、前回の経験や課題意識を活かした工夫が見受けられるようになった。第4回目では、Orient 領域において「役割」「協力」「連携」など協働的視点を含む語彙が増加した。また、他者の行動や意図を推測する記述が増加し、状況把握の視点が自己中心的なものから関係論的なものへと転換し始めていた。Decide・Act 領域では、直近の経験や反省をもとに次の行動を自律的・戦略的に考える記述が増加し、全体的に記述量や詳細さが向上した。

これらの結果から、OODA ループを用いた学習カードは、わずか3回の授業においても学習者の「状況の見立て」の変容過程を可視化する有効なツールであることが示唆された。学習者は、可視的対象の観察から関係性の認識へ、断片的判断から分析的・協働的判断へと、状況把握の質を深化させていた。この変容は、本研究が理論的基盤とする「関係づくり」を基調とした学習観（益川，2025）と合致する。すなわち、学習者は教師が提示する「正しい動き方」を再現するのではなく、ゲームの状況において他者との関係性を自ら読み取り、自身の役割を主体的に構成していく過程で学びを深めていたと解釈できる。OODA ループを用いた学習カードによる継続的な振り返りは、学習者の認知プロセスの深化と自己調整力の向上に寄与したと考えられる。本研究で開発した学習カードは、教師主導の正解へと導く指導から、学習者の主体的・探究的な学びへの転換を支える評価ツールとして有効であることが示唆された。今後の課題として、より長期的な単位における変容の検証、および他の型への適用可能性について検討していく必要がある。

引用文献

- 益川満治（2025）ボールゲームの授業における学びの認識論的検討。体育・スポーツ哲学研究,47(2),（ページ未定，印刷中）。
- チェット・リチャーズ（2019）OODA LOOP(ウーダループ) 原田勉（監訳）。東洋経済新報社。
- 益川満治ほか（2025）分業に基づくバスケットボール授業が状況判断に及ぼす影響：学習意欲と積極性からの検討。身体運動文化研究, 30(1), 47-68.

佐藤卯吉の剣道論にみられる思想的展開
ー「国民体育」振興との関連に着目してー
堀川 峻（環太平洋大学）

I. 研究の背景及び目的

大正末期以降、明治神宮競技(体育)大会や全国体育デーの実施を契機として、本格的に「国民体育」の振興が開始されると、永井道明・大谷武一らを中心とする東京高等師範学校関係者は、体育行政の中核を担うこととなる。戦前・戦時期に至ると、天皇制を基盤とする国家主義的な思想の高揚に呼応して、文部省の方針の下、体育行政も「思想善導」の手段としての性格を強めていく。こうした経緯から、東京高等師範学校関係者は、しばしば国家主義的な体育施策を積極的に遂行した人物という、一面的な見方がなされてきた(森川貞夫, 2000)。佐藤卯吉(1895-1975)は、東京高等師範学校を卒業、同校に入職後、昭和 11 年の「第二次学校体操教授要目」制定に際して剣道の調査委員に任命されるなど、「国民体育」振興の中で教育的に剣道を位置づけた代表的な人物である。そのため、戦前・戦時期の武道史を扱う先行研究においても、卯吉は多様な視点から注目されてきたものの、「国民体育」振興上における卯吉の立場や役割の変化と、剣道論の思想的展開との関連性については、必ずしも十分に検討されてこなかった。この点を明らかにすることは、卯吉の剣道論をより深く理解する手がかりとなるだけでなく、東京高等師範学校関係者が抱えた、国家的イデオロギーと個人的信念との内在的な葛藤を明らかにする試みともなり得る。以上を踏まえ、本研究は、佐藤卯吉の剣道論にみられる思想的展開を、戦前・戦時期における「国民体育」振興上における立場・役割の変化との関連に焦点を当てて明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究と問題の所在

卯吉の剣道論に関する先行研究は、概ね 3 つに整理できる。第 1 に、大正末期における「武道のスポーツ」化言説の端緒として、卯吉の言説に注目した中嶋哲也(2017)の研究。第 2 に、剣道の教授要目制定に関わる卯吉の思想を、教授要目や解説書の分析を通して検討した田中鎮雄(1981)、香田郡秀ら(1996)の研究。第 3 に、キリスト教の牧師である吉田清太郎との交流を契機に形成された「愛の剣道」に関する言説に焦点を当てた大保木輝雄(2022)らの研究である。これらの研究が示すように卯吉の剣道論には、当時の体育・スポーツをめぐる社会的文脈や、キリスト教的な倫理観など、複数の思想的な要素が交錯しており、上記の研究はいずれも個別の側面を扱うに留まっている。その中でも、坂上康博(1988, 2018, 2019, 2023)は多くの論稿で卯吉を取り上げ、満洲事変以前に「スポーツ」としての剣道を肯定する自由主義的立場をとりながら、以降の論稿からは日本主義的・保守的な傾向が見出されることを指摘しているが、最終的には戦時下の制約の中でも剣道の普遍的な価値を追求した人物として卯吉を評価している。しかし主要な活動領域であった「国民体育」振興上における立場や役割の変化との関連を軸にして、卯吉の剣道論の展開を通時的に捉えた研究はみられない。本論の問題の所在はこの辺りにある。

III. 研究方法及び研究資料

先行研究では、大日本体育学会によって発行された雑誌「体育と競技」に寄稿された論説を集約した『日本体育叢書 21 編 剣道』や、卯吉の遺稿集である『永遠なる剣道』等に依拠して考察を行ったものが多く、卯吉の論稿を通時的に整理して、思想的展開を明らかにする試みは十分に行われてこなかった。そのため、本論では大正 13 年～昭和 50 年に至る、卯吉の著述活動を網羅的に把握・整理した上で、その思想的な展開を分析していく。また卯吉は「体育と競技」において約 4 年間の編集委員を務めており、昭和 4 年の 8 巻 6 号～昭和 8 年の 12 巻 5 号に至るまで、毎月「巻頭言」を執筆しているが、これらの著述を含めて卯吉の剣道論を検討したものもみられない。本論では、それら全ての著述を考察対象として分析を進めていく。

IV. 結果及び考察

大正 13 年「剣道の価値如何」において、卯吉は「若し剣道をして體育的たらしむるならば純真なる剣道より見れば或る意味に於て墮落したるものと思ふを得可し」として、「純真なる剣道」に比して、「體育的」な剣道が「墮落した」ものであると評価している。これは、昭和 3 年以前の論稿に共通してみられる見解であり、例えば大正 15 年「剣道啓蒙」では「現今の剣道は體育的に取り扱はれし傾向ありて、一中略一此の意味に於て現在の剣道は墮落しつつあるものといふ可し」、昭和 2 年「剣道指導者の態度について」では「若し剣道を純粹なる體育法たらしめんとするならば、剣道の今日の形式を改造しなければならなくなつて、剣道ではなくなる」などの記述がみられる。しかし、昭和 4 年以降の記述をみると、昭和 4 年「新時代の要求する剣道」では「現在の剣道を純粹の武術として要求することが、果たして妥当であるか否か?」、「学校教育の手段としての剣道は一般的に此處迄要求する必要ありや否や」など、教育としての剣道が要求される時代に「純粹の武術として」の必要性を疑問視する言説がみられるようになり、その後は「国民体育」振興上において剣道の教育的な価値を説くものが増えていく。例えば、昭和 7 年「柔剣道科を振興せよ」では「國家の現在及び将来に向つて教育上最も切實、適好且必要の道であつて、而も最も賢明なる手段であると信ずるものである」として、剣道の教育上における価値を強調している。その中で、昭和 11 年「剣道と青年訓練」では「體育運動に関する先進国である欧米の人々は何れも其の國固有の運動方法即ち國技を尊重し、其れによって各々固有の國民性を育て上げんとして努力して居る」としており、「國民性」の育成という目的の下に剣道を振興することは、欧米の「体育」にも共通する考え方であるとしていた。戦後、晩年に至った卯吉は「病みて思うこと」において、「健全なる心身を養成」するための「體育」的な剣道を超えた、「一身を犠牲」にする程の「真理の追究」に剣道の価値を見出しており、「わが剣道の稽古ぶりは、体育の程度を超えていると思っていた」と自身の人生を振り返っている。つまり「国民体育」振興の任を終えた卯吉は、「体育」を超えた「真理の追究」としての剣道の価値を明示するに至っていた。卯吉の「国民体育」振興上における立場や役割の変化との具体的な関連性など、詳細な考察は、紙面の都合上割愛する。

明治初期における東京大相撲協会の形成

楊 紅梅（筑波大学大学院） 齋藤健司（筑波大学）

1. 研究動機及び目的

現在の公益財団法人日本相撲協会は、大相撲という伝統的な身体文化の普及振興を目的とする団体であり、力士、年寄、行司などの固有の組織制度を江戸時代から継承してきた。このように、日本相撲協会は、一般の中央競技団体とは異なる独自の伝統的組織構造を保持しており、その制度がどのようにして近世から近代、さらに現代へと維持・発展してきたのかを明らかにすることが本研究の動機である。特に、明治初期において相撲団体は、江戸時代に勧進相撲の株仲間として発達した相撲会所は、明治元年（1868）に東京相撲会所となり、明治22年（1889）に東京大相撲協会へと改称された。そこで、本研究においては、江戸時代から存続してきた相撲団体が、明治初期においてどのような制度改革を経て「相撲協会」として組織化されたのか、その歴史的過程を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 研究方法

本研究では、主に明治元年から明治22年までの間の相撲団体の組織制度の形成の過程について、相撲団体に関係する取締規則、内部規則、新聞記事、公文書などの一次資料を発掘し、その事実過程を分析した。また、明治初期における相撲団体の内部規則の条文の変化を比較分析した。そして、以上の分析の結果に基づいて、明治初期における相撲団体の組織制度及び東京大相撲協会の形成の過程を考察した。

3. 結果及び考察

(1) 明治初期の歴史過程

明治改元（1868）、江戸相撲会所は東京相撲会所と改称されることになった。しかし、明治維新の廃藩置県により武家体制の崩壊、明治6年株仲間解放令の発布、明治9年（1876）の相撲興行の管轄行政権の警視庁への移管などの「外的圧力」、並びに明治6年（1872）の東京相撲会所からの高砂浦五郎の力士の待遇改善及びし改正組の結成などの「内的圧力」によって、明治11年（1878）2月に警視庁は「角觥並行司取締規則及興行場取締規則」を発布した。その後、明治11年（1878）5月に改正組と東京組が合併し、内部協議によって「角觥営業内規則」を制定し、取締年番、興行損益計算、力士の給金に関する規定を定めた。

明治17年（1884）の「同業組合準則」に基づき、東京相撲会所は明治19年に角觥仲間申合規則を制定し、役員組織を新たに規定した。また同規則に、「会社」と称する規程も存在していったが、年寄仲間による同業組合として位置付けられた。

明治16年（1883）と明治20年（1887）に、高砂は取締に就任すると、相撲団体の組織改革を行った。特に、明治20年の力士の大達事件に関係して、破門とする懲罰による

営業鑑札をめぐる紛争が生じた。さらにその後、相撲会所は「高砂は会所の役員に選挙せぬ」ことに決定し、高砂と東京相撲会所の訴訟が生じたため、明治 20 年（1887）「角觥組中申合規則」を制定して東京相撲会所は東京角觥協会と改称し、同業者同盟組合へ推進した。

明治 20 年の高砂の訴訟では、高砂は相撲部屋の師匠と師弟との利益分配の在り方について反対した。さらに、政治家等による相撲団体を会社として設立し年寄を排除することの意見などに対応して、明治 22 年（1889）に東京大角力協会申合規約によって東京大角力協会として設立され、全国的な同業組合の同盟組織としての基礎を確立した。

(2) 関連規則の条文の比較分析

役員の構成については、江戸時代には「勧進元」、その後「世話役人」、「筆頭筆脇」維持されてきた役員の地位及び名称は、明治 11 年 5 月の規則では、「筆頭筆脇」から「取締年番」へ、勧進元から「願人差添人」へ変更された。明治 19 年の規則では、「組長」、「検査役」が増加され、明治 22 年の規約では、「取締」「検査役」「部長」「副部长」など常設的な役員制度が正式に設置された。

興行損益金の精算と分配に関しては、明治 11 年 5 月の規則では損益金の精算人が「願人差添人」から明治 19 年の規則では「願人 2 名」に改称し、明治 22 年の規約では「願人」が引き継がれ、さらに、損益金配当には横綱に分配することが追加された。給金に関しては、従来の「給金増減」「番付順席」に基づいて、力士の給金昇進、取締検査役の給金、行司の給金、年寄の給金、半額及び減額など詳細な制度に発展した。

給金制度及び順席と減額に関しては、明治 11 年 5 月の規則では「給金増減」による「番付順席」を定めた。明治 19 年の規則では、「勝負検査」のもとで、勝負星による「給金の増加」を定め、明治 22 年の規約では、「給金増加及び順席」の要旨が引き続がれた。さらに、興行階級、勝負異議の裁定権限、支給の金額、力士の昇進階層、師弟間の給与及び雑金の支給など条文細分を追加した。

年寄に関しては、明治 11 年の規則では「年寄席順」を明治 19 年の「年寄一同協議」へ、明治 22 年の規約では、年寄人数の限定、年寄名義の相続・譲渡など詳細な規定がなされた。さらに、歩持年寄株の加入金、相続、株券売買が規定された。

4. 結論

本研究は、明治初期における相撲団体形成の歴史的過程を明らかにした。明治初期の警視庁が制定した「角觥並行司取締規則」（明治 11 年 2 月）を契機として、会所内部で制定した「角觥営業内規則」（明治 11 年 5 月）は取締年番制度を確立したことにより、興行収益計算や力士待遇の合理化を目指す第一次力士給金の改革が進められ、組織制度の近代化が始まった。明治 20 年高砂が師弟間の給与の制度を反発したことにより、年寄の地位・権限・利益の維持を図るために、第二次力士給金の改革が行われた。その結果、明治 22 年の「東京大角力協会申合規約」を制定し、全国的同盟組織である東京大相撲協会が形成された。

日本における素潜り漁と関連する文化の考察

鉄 多加志(東海大学)

I. 研究の背景と目的

これまで日本における潜水の始まりは、物証においては貝塚から潜水をしなければ採取できない貝殻（鮑）の出土期によって、約 5,000 年前であるとされてきた。

また、3 世紀後半に中国の歴史書である魏志倭人伝に素潜り漁の様子が記載されたことで、はじめて文字による伝承がされた。

素潜り漁が始まるまでは、海藻や貝類の採取は海岸線からのいわゆる潮干狩りであり、潜る必要性がなかったと考えられている。しかしながら、鮑などのある程度の水深に没しないと採取できない種になると、海からの食糧調達は素潜り潜水という、過酷な身体運動を伴う方法へと変化してゆく。その後、素潜り漁は単なる食料の調達にとどまることなく、装飾品や工芸品の材料の入手という文化や風俗に対して重要な役割を担うことになり、和歌を始めとする古典籍に、たびたび海人（あま）が題材として取り上げられるようになり、その存在や認識は、上流階級の歌詠みなどからの関心から始まって、芸能や文化へと結び付き、その後は広く庶民文化へと浸透していった。

本研究は、潜水という身体運動を通じて漁と文化が関連性を持った歴史を整理し、これまで日本が歩んできた素潜り漁の歴史と関連の高い文明や古典籍、芸能や風俗との親密な関係性を考察した。

II. 方 法

年代別の国内における主な貝塚や遺跡・史跡からの出土した品（風俗を含む）を精査して、素潜りが必要となる鮑の貝殻が現れた最古の年代を特定し、その後については潜水によって採貝した装飾や工芸品への利活用について、風俗や文化との関係性を調べた。次に魏志倭人伝や日本書紀、古事記、万葉集、延喜式、枕草子、今昔物語などの古典籍（芸能を含む）を俯瞰視して、関連する文献や研究資料を素潜り漁に焦点を絞って広域に検索し、明治初期にヘルメット潜水器が輸入され、日本国内で機械潜水が始まるまでの素潜り漁に関する記述や資料を収集した。

III. 結 果

貝塚でみられる鮑の貝殻の年代においては、長崎県の五島列島にある大板部貝塚で、日本で最も古いと考えられる 6,000 年前の地層から出土している。その後、琉球列島や奄美諸島から夜光貝やゴホウラ、アンボンクロザメなどの食用が主な目的ではなく、当時流行した貝輪の材料として採貝され加工が施された。遺跡や史跡からの出土・包蔵品においては、正倉院に収蔵されている琵琶などの楽器には、鮑や夜光貝を砕いて真珠質を使い、螺鈿細工として装飾に使用している。鶴岡八幡宮に奉納したと伝えられる北条政子の手箱にも、螺鈿細工が施されおり、国宝や重要文化財に指定されている。

上記に加え、風俗の観点、古典籍の観点、舞台芸能、古典落語などの文化と素潜り漁の関連を略歴年表として時系列にならべて、潜水が必要である漁についての関連付けを行い表にまとめた。

表. 素潜り漁が関連する文明と文化の略歴年表

潜水器日本輸入	1971 明4	海人の浮世絵
北条政子螺鈿細工の手箱	1600 年代	幸若舞曲
	1563 永禄6	浜出の背景
	1200 年代	今昔物語
	1100 年代	枕草子
ヤコウガイの需要拡大	1001 年	延喜式
	927	万葉集
	759	日本書紀
	720	古事記
	712	仏教伝来
法螺貝の需要	6世紀中期	魏志倭人伝
アンボンクロザメの貝輪	3世紀後半	魏略逸文
ゴホウラの貝輪	3世紀中期	消失した見聞録
	2世紀前半	弥生時代後期
貝塚の衰退	2000 年前	
ベンケイガイの貝輪の流行	3500 年前	
与那国夜光貝の蓋	6000 年代	
徳之島面縄貝塚	縄文前 中期	
長崎の貝塚で鮑の貝殻	6000 年前	
三浦半島に日本最古の貝塚	10000 年前	

IV. 考 察

6,000年前の長崎五島列島の大板部貝塚から出土した鮑の貝殻について、当時は潜らずとも磯で獲れるほど浅瀬にいたのではないかとの推察がある。しかしながら、どの時点で潜らなければ採貝ができなくなるのかは、不明であるため、鮑の貝殻が貝塚に存在した6,000年前を日本国内における素潜り漁の始めと考察する。

初期の古典籍については、魏書などが参照とした見聞録は237年から247年にかけて、東夷の奥深くまで実地に見聞した報告書で、魏略や魏志は、それに基づいて書かれていたと考えられている。つまり、2世紀前半から中期には、倭人による潜水漁は記録されていたと考えることができる。また、和歌や枕草子、今昔物語、古典落語、浮世絵、風俗画などにも海人（あま）の存在を示す一幕があることは、素潜り漁が上流階級からはじまり、江戸時代には庶民文化へと浸透していることが考察された。

V. 引用および参考文献

- 1) 忍澤成視, 貝の考古学, (株) 同成社, 2011.
- 2) 木下尚子, 正倉院と夜光貝, 熊本大学学術リポジトリ, 83-106, 2003.
- 3) 清武雄二, アワビと古代国家, 平凡社, 2021.
- 4) 小林美和, 室町時代の祝言と食文化, 帝塚山大学現代生活学部紀要, 第一号 39-48, 2005.
- 5) 境一郎, 一個 52 万円のアワビ文化, 成山堂書店, 2000.
- 6) 潜水士テキスト, 中央労働災害防止協会, 2021.
- 7) 鳥羽市立海の博物館, 浮世絵から見る海女, 2020.
- 8) 西川吉光, 海民の日本史 1, 国際地域学研究, 第 19 号, 2016.
- 9) 野上健紀, 他, 長崎県・福江島水中文化遺産調査, 金大考古, 61, 2008.
- 10) 山尾幸久, 新版魏志倭人伝, 講談社現代新書, 1986.

あなたのスポーツ経験を社会でも活かせるよう、
私たち体育会出身スタッフがしっかりサポートします！

すべての“アスリート”たちに
体育会にしかできない就活がある

武器はキミだ。



体育会学生向けの
就活支援サービスが充実



部活も就活も頑張る
体育会学生の就活をトータルサポート！
体育会学生限定の求人紹介イベントや
合同説明会を実施しています。



合同企業説明会で大手企業や優良企業の
選考免除・内定を獲得！
←就活イベントのご予約はこちら



ジール就職サポートはアスリートの
みなさんの就職活動を応援します！



就活準備は
ジールで始めよう！

ジールができる3つのサポート

- ① 合同企業説明会へのご招待
- ② 3000社の中からあなたにあった求人の紹介
- ③ 企業研究、書類添削、面接対策など就活の
悩みをまるっと解決



就職活動における悩みをなんでも解決いたします！
←ご相談はこちら

こだわりは上達の秘訣

正武堂オリジナル 「鐵型」甲手

「素手感覚」で無理のない握り

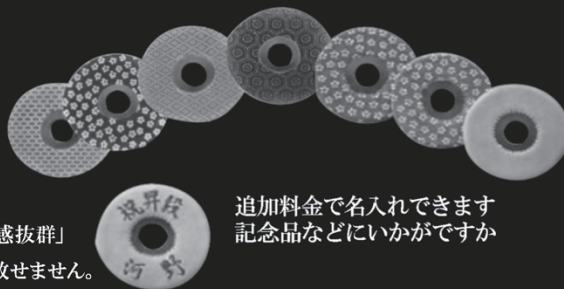


剣道の技術の向上にともない竹刀を大きく、早く、強く振れるようになります。

そのため、より繊細な指の動きが要求され、その動きを「表現」出来る甲手が要求されます。

職人の経験と剣道家のアイデアが結集した剣道具

心の如く鰐は不動 不動



「稽古中に鰐が落ちてこない」「薄くて軽いので使用感抜群」

色柄のパリエーションも豊かです。一度使用したら手放せません。

追加料金で名入れできます
記念品などにいかがですか



伝統と機能性の追求

剣道具製造販売・武道具販売

東京正武堂

営業時間 火曜日～土曜日 AM10:00～PM7:00

日曜日 AM10:00～PM5:00

定休日 月曜日・第二、第四火曜日・祝祭日



アクセス

JR山手線五反田駅東口 徒歩5分

都営地下鉄浅草線五反田駅A3口 徒歩5分

東急池上線五反田駅 徒歩6分

本社 〒141-0022 東京都品川区東五反田5-22-33

TEL:03-3442-8181(代) FAX:03-3442-2587

URL: <https://t-shobudo.com> E-mail: info@t-shobudo.com

館林工場 〒374-0021 群馬県館林市瀬戸谷町2180-4-102

TEL:0276-55-4172 FAX:0276-55-4175

Instagram



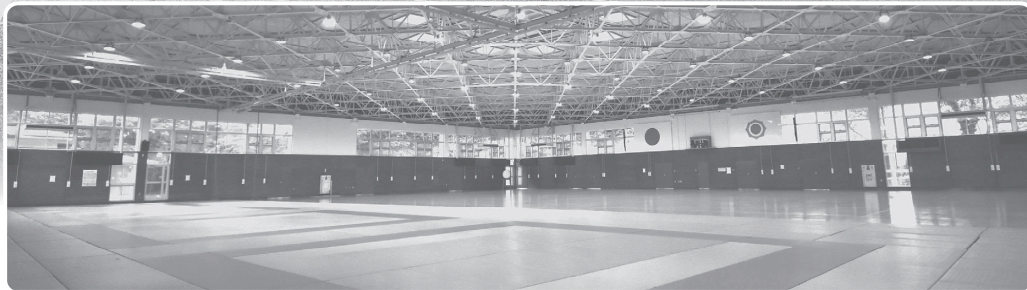
南房総かつうら NIPPON BUDOKAN TRAINING CENTER

日本武道館研修センター

耐震補強工事平成13年実施



日本武道館研修センターは、一年を通して過ごしやすい気候の千葉県勝浦市にある、公益財団法人日本武道館の直営施設です。武道や書道を修練する人たちははじめ、広く一般の皆様にも、ご利用いただける宿泊研修施設です。当施設は、大道場、研修室、弓道場及び宿泊棟の全館冷暖房、フリーWi-Fi完備と研修・合宿などに十分なスペースと環境を備えた最適な施設です。また、耐震補強工事平成13年に宿泊棟、令和2年には道場棟を実施済みであり、高台（海拔44メートル）に位置していることから、災害時の避難場所として勝浦市が指定する安全な施設でもあります。



大道場…1000畳の広さ(分割使用可)冷暖房完備



弓道場…9人立ち、男女更衣室、冷暖房、男女トイレ完備



第1研修室…武道の稽古にも使用可



相撲道場…シャワートイレ完備



宿泊室A(和室)10部屋



宿泊室B(洋室)30部屋



ロビー



食堂 ビュッフェ形式で食べ放題! パーベキューは4月～10月利用可能



宿泊料金

●武道(通常期:4～6・10・11月)
1泊夕食・朝食付

区分	宿泊室A	宿泊室B
大人	7,700円	7,150円
小・中学生 幼児無料	7,370円	6,930円

・幼児の室料は無料です。昼食料金…990円
・食事はビュッフェ形式。
・宿泊利用での施設使用料は無料です。ただし、宿泊を伴わない場合は、別途使用料金を頂きます。

●武道(繁忙期:1～3・7～9・12月)
1泊夕食・朝食付

区分	宿泊室A	宿泊室B
大人	8,250円	7,700円
小・中学生 幼児無料	7,920円	7,480円

武道の合宿をはじめ、文化系(書道等)、スポーツの合宿、研修、講習会、その他会議、パーティー(式典等)、サークル、個人の方などに幅広くご利用いただいております。

●お問い合わせ・ご予約・お申し込み先は…

日本武道館研修センターまで
〒299-5231 千葉県勝浦市沢倉582
TEL 0470-73-2111 FAX 0470-73-2819
日本武道館ホームページ又はGoogleマップで館内の施設が確認できます。

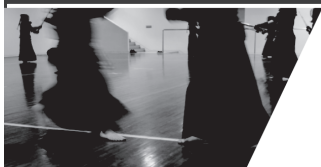
日本武道館研修センター



武道場床専用塗料

WATCO

ワトコベアーフットオイル



武道場は床が命



- 摺り足しやすい床へ — 剣士の足腰の負担が軽減され、疲れづらく、質の良い稽古の助けとなります。
- 木材を保護する — ササクレなどの木材劣化を抑制し、剣士のケガの防止と美観の維持に役立ちます。
- 簡単なお手入れ — 定期的なメンテナンスも手拭きで行えます。



日本武道館小道場・中道場にご採用頂いております。
その他、全国各地の剣道場に採用実績がございます。



北三株式会社
本社

〒136-0082 東京都江東区新木場 1-7-6
TEL : 03-3521-2111

ワトコ商品センター 〒301-0856 茨城県龍ケ崎市貝原塚町 3085

TEL : 0297-62-3482 MAIL : watco-info@hoxan.co.jp



←HPはこちら

私たちはオフィスの未来を提案します。

We are specialists of the office equipment sales that provide trusted commodity, information, and service, and it proposes a rich work environment.



OA機器総合商社 **アロー事務機株式会社**

TEL 03-5945-1280 <http://arrowjimuki.com>

取扱品目：コピー機 / コンピュータ / オフィスサプライ / オフィス家具 / 家電 / 文具等

京王観光は皆様に

旅 京王観光

感動と安心をお届けします。

旅行業務全般, チーム遠征(国内・海外), 合宿, 大会エントリー受付

【ご連絡先・お問い合わせ先】

京王観光株式会社 団体旅行営業部 神奈川北支店

TEL : 042-786-6155

Mail : kanakita01@keio-kanko.co.jp

神奈川県相模原市中央区鹿沼台1-3-12パロス竹内3F

祝 身体運動文化学会創立 30 周年記念大会

陳列豊富な剣道具の専門店

真剣堂

上大岡店	火曜～金曜 10:00～19:00 土・日・祝 10:00～18:00	月曜定休（祝日の場合は休業） ※1月1日～3日は休業とさせていただきます
京浜急行 上大岡駅 徒歩5分 駐車場あり	〒233-0007 神奈川県横浜市港南区大久保1丁目14-6 TEL 045-844-3981 FAX 045-350-3570	
横須賀店	月曜～金曜 11:00～19:00 土・日・祝 11:00～18:00	水曜定休 ※1月1日～3日は休業とさせていただきます
京浜急行 逸見駅 徒歩1分 JR横須賀駅 徒歩10分 駐車場あり	〒238-0045 神奈川県横須賀市東逸見町2-2 TEL 046-824-3636 FAX 046-854-4455	

<http://www.sinkendo.com>  @shinkendo.yokohama

わたしたちジェイヴィコミュニケーションズは 未来の社会人を応援している企業です。

LOGISTICS

ダイレクトマーケティングの
実績をもとにニーズに応じ
豊富な物流ネットワークで
最適な物流をご提供します。
お客様と御社とを
直接結びつけます。

SALES PROMOTION

企業と生活者を商品
サービスを通じてより良い
コミュニケーションを
創り上げるため
生活者の視点での確な販促を
ご提案します。

CREATIVE

わかりやすく美しく
斬新なアイデアを追求し
高品質な訴求力で
企業と生活を結ぶ
「伝わるデザイン」を
ご提供します。

FULLFILLMENT

キャンペーン事務局の受付
業務からデータベース管理
賞品発送、各種ツール制作まで
類雑な業務も万全な
セキュリティ体制で
運営しています。



株式会社 ジェイヴィコミュニケーションズ

〒104-0061 東京都中央区銀座 7-15-5 共同ビル 3F
TEL.03-3542-7921 FAX.03-3542-7933
<http://www.jvgroup.co.jp>

阪急交通社は

身体運動文化学会を応援しています！

心に届く旅



阪急交通社

Direct to your heart

～旅行行事のお問い合わせはこちら～



阪急交通社 教育旅行支店



03-6745-7310



03-6745-7372



tyo-edu@hei.hankyu.co.jp

DAIKEN

おかげさまで創立80周年

ずっと こちいいね

80TH
Anniversary

2025年9月26日より大建工業株式会社は

DAIKEN株式会社へ



DAIKEN
◀ 80周年特設サイトは
こちらへ

新規社員募集

スポーツ施設造りの専門集団

スポーツ施設の
企画・設計・施工・コンサルタントとして



ちょうえい

長永スポーツ工業株式会社

TEL:03-3417-8111

長永スポーツ

で

検索



Instagram

鍛えた体に、勝者のスーツ

袖を通したその日、自信も装った

アスリート向け
注文受付中

筋肉で築いたその体に、市販のスーツは応えてくれない。

だが、“オーダー”という選択が、あなたの努力を正しく映す。

初めて自分にフィットする一着に袖を通したとき、

人生の勝負シーンにも、“アスリートの誇り”をまとうことができる。

アスリートの鍛えられた体を、論理的にフィットさせる

・肩幅に合わせつつ、ウエストを調整
⇒体型に沿った美しくシルエットを実現

・左右差や筋肉量の多い部分を考慮して採寸
⇒着脱や動作時の突っ張り感を軽減

・体格傾向や競技特性に合わせた調整
⇒既製スーツでは対応しづらい体型にも対応

アスリートに嬉しい3つの特典

- ・キングサイズ料金不要
- ・在学中のサイズお直し無料
- ・ベスト、ズボン単品販売可能

特別価格

¥42,900(税込)

今すぐ LINE から簡単に
ご予約いただけます

1. QRコードを読み取り、
2. 「予約フォーム」をタップ
3. 「オーダースーツ相談」を選択



D' frame

株式会社 D'フレイム

〒101-0061

東京都千代田区神田三崎町2-7-6 JR 総武線 水道橋駅徒歩3分 ☎ 03-6272-4805



大宮明德館道場



IDA GROUP

東和アークス株式会社

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町4-384

FAX : 048-643-1568

URL : <https://www.towa-arks.co.jp>



書籍・学会誌・自分史



カタログ・社内報・伝票

**[株]
文成印刷**

東京都杉並区方南1-4-1 ☎ 03-3322-4141 FAX 03-3322-4144

想いをカタチに！

オリジナルマスク・Tシャツなどを作成いたします。
スポーツをする人、チームでがんばってる人、
応援する人の気持ちの上がる商品をつくりたい！！

HOYLE はスポーツ製品の販売・卸から
二次加工（刺繍・プリント・マーク）を
しているスポーツ総合商社です。

HOYLE 株式会社

埼玉県所沢市東所沢 3-38-2 アインス東所沢1F
TEL: 04-2946-9203 FAX: 04-2946-9204



www.matsukan.jp



松勘工業株式会社

〒347-0056 埼玉県加須市土手1-4-27
TEL.0480-61-2211(代) FAX.0480-61-2044



地域の皆様への
感謝を価格に！



株式会社gnop
本社 茨城県土浦市手野町3670
TEL 029-828-0701
FAX 029-828-0736

そば処



〒156-0044
東京都世田谷区赤堤4-30-6
TEL 03-3328-1104
営業時間 11:00～15:00
17:00～20:00

since 1964

スポーツ用品、スクール(学校指定)

用品全般の継続的なご提案、ご提供のほか

体育施設、設備のメンテナンス事業、+

学校内購買部受託事業を

× 本格的に取り組んでおります。

+

since 1964 株式会社
スズ・スポーツ・ボックス

本社 〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-17
TEL: 03 (3233) 3711 FAX: 03 (3233) 3716

総合スポーツ用品販売

オリジナルプリント各種
オリジナル刺繍
昇華ユニフォーム作製
オリジナル旗・横断幕
オリジナルタオル

その他、さまざまなご要望に誠心誠意対応致します。

(株)スポーツボックス

J R 中央線	至 西八王子	至 国道20号線	至 国道20号線
至 国道20号線		至 国道20号線	

★ 2F-3F まで

東京都八王子市並木町21-2
TEL 042-666-2525 FAX 042-665-2525
e-mail: box@print-shisyu.com

SPORTS BOX

HARMONY with the FUTURE

信頼を形に・調和を未来に

鉄鋼一次指定商社 鋼板加工センター
古賀オール株式会社

本社 東京都中央区日本橋小伝馬町7-2
TEL. 03(3666)1331 (代表) FAX. 03(5695)7756~8

●支店/支店長 東北・甲信越 ●工場/支店 支店長 東北・甲信越
●URL: <http://www.koga-all.co.jp> ●ISO 14001 全社認証取得 (QA-ENV302)





日本大学大学院 文学研究科

哲学専攻 / 史学専攻 (日本史専攻 / 外国史専攻) / 国文学専攻 / 中国学専攻 / 英文学専攻 / ドイツ文学専攻 / 社会学専攻 / 教育学専攻 / 心理学専攻

日本大学大学院 総合基礎科学研究科

地球情報数理科学専攻 / 相関理化学専攻

日本大学大学院 理工学研究科

地理学専攻



日本大学文理学部

哲学科 / 史学科 / 国文学科 / 中国語中国文学科 / 英文学科 / ドイツ文学科 / 社会学科 / 社会福祉学科 / 教育学科 / 体育学科 / 心理学科 / 地理学科 / 地球科学科 / 数学科 / 情報科学科 / 物理学科 / 生命科学科 / 化学科

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 TEL : 03-5317-9677,9678

WEBSITE : <http://www.chs.nihon-u.ac.jp/>



日本大学櫻丘高等学校

〒156-0045 東京都世田谷区桜上水 3-24-22 TEL : 03-5317-9300

WEBSITE : <http://www.sakura.chs.nihon-u.ac.jp/>



櫻丘高等学校 生徒会館・体育館・人工芝グラウンド